

# 異世界帰りの○△の 弟！？

酔生夢死陽炎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、新幹線に乗って東京に向かう猩

向かう途中で新幹線内で不思議なものが!?

え？異世界にいつてきたあ!?

帰ってきたら、元の時間ではなく。数年先の世界？

しかもここって……

と言う風に、ある人物の弟は異世界にいつて帰ってきたそうです

アンケート追加しました

# 目次

別れて出会って、出会って別れて！	1
異世界から飛び出し空のうえ！	12
気づいて…気づきたくなくて…	18
熊、熊、熊！と場所が飛んでの…ナニゴト!?	26
近づく影と襲われて	33
シエアハンド！シエアハウス!?そして仲間たち!!	42
設定!!	49
C i R C I E 前に到達?	53

ねえ?知ってる?○○って○○を切れるんだよ?	61
雨空はきつと悲しみが多い…だが気分は晴れる	69
雨の後には虹が架かるがまだ強い風が残っていた…	78
情報と女装とライブ前!!	85
ライブは終わり夜がくる…闇からナニカやってくる…	95
闇から生まれたのは病みだけではない	114
刺し傷と拒否とメイド?	130
治療とメイドと行方不明期間	141

起床と朝食と一波乱!!? | 152

起床とバンドと……ネットゲ??? | 160

NFOく最東端の村く何処か見覚えが

……? | 170

NFO 村を一望できる墓 | 184

NFOく始まりの終わり、新イベ!そしてテスト期間は過ぎ去る | 195

NFOく頼まれた依頼と上に立つもの

| 202

NFOを終え、ライブの練習の前の喧騒

| 217

熱い?冷たい?まりなの話と夕焼けとの

出会い? | 232

花咲川女子学園にやってきたあああ!!

別れて出会って、出会って別れて！

少し薄暗く、雲が多い空

太陽が東に落ちていつている

そんなある家の会話で

僕は、友達に会いに東京に行こうと家族に相談していた

「ねえ、父さん。レンから、この連休こちらに泊まりにきませんかって手紙がきたんだけど、行ってもいいかな？」

「ああ、行っても構わないが道中気をつけて、レン君の家族に迷惑かけないようにするんだぞ」

「大丈夫だつて、レンとは色々遊びに出かけてたから迷うことは余程のことがない限り大丈夫だよ」

「そうかそうか。そしたら準備を手伝ってやるから、母さんたちに一言いつてきなさい」  
「はい、了解」

その日のうちに僕は準備を終えて、明日の朝のうちに出かけようと玄関に荷物を運んでいた。

いつも通り、連休が明けたあとの準備もすでに終えており、出発のみであった

「ねえ、猩」

「ん? どうしたの姉ちゃん」

「やっぱり一人で出るの危なくない? やめといた方がいいよ」

「大丈夫だよ、姉ちゃん。こういうの慣れてるし、もう小学生じゃないんだから。それに、姉ちゃんも夢のために色々してるんだろ?」

「そうだけど、なんか嫌な感じがするんだ」

「嫌な感じって。姉ちゃん前にもいつて外れてたじゃんかー」

「でも!!」

「大丈夫、僕の家はここだから、ちゃんんと帰ってくるよ」

僕はそういつて、姉ちゃんを安心させるように抱きしめた

姉ちゃんは少し満足してないが安心できたようだった

「そろそろ時間に間に合わなくなるからそろそろ出るね」

「うん、○○君の家についたら連絡してね！ ゼツタイだよ！」

「もー、姉ちゃんは心配しすぎだよ！ それじゃあ、いつてきます！」  
「いつてらっしゃい！」

僕はそして、家をでて駅に向かっていった。

駅についてから、新幹線で東京に向かう

それだけのはずだった。

「さーて、駅についたから新幹線の券もしっかり入手したし、あとは新幹線を待つだけだなー！」

少し広い駅の中、猩は一人新幹線を待っていた。

「しっかし、そろそろくるっていうのに、誰もいないんだなあ。でも、その分座りやすくなるし、ありがたいね」

陽気にそんなことを考えていると

駅のスピーカーから新幹線がもうすぐ到着するとの連絡が響いた。

僕は荷物を確認し、場所を新幹線の出入り口あたりに移動する。

そして、新幹線が駅に到着し、出入り口が開く

降りる人は誰一人いなく、乗る人も自分のみ。

少しの違和感があるものの、東京に向かいたい気持ちが高まっており、後回しにする。席に向かうと、いつもなら少し人がいて賑わってるはずなのに、誰一人、新幹線に乗っている様子なかった。

出入り口は閉じ、新幹線が走り出す。

少しして、何一つ音がしないことに気づいた猩は、席を先頭車両に移す  
そこで気づいたのだった。



何故、出発時にアナウンスがなかったのか

何故、何一つ音がしないのか

何故、誰一人姿が見えないのか

それは運転席を見て気づいてしまった。

【運転席に誰もいないのだ】

そのことに気づいた自分は誰か他にいないのか走り出し、先頭から最後尾まで見回つたが自分以外誰もいないのに気づくと、急いで荷物を取りにいった。

荷物を持ち、どこか出られる場所がないか探していると何かテレビで見たような箱があつた

恐る恐る近づき、箱に手を伸ばし、触れようとした瞬間——

見えたのは減少していく数字『0:03』であった

『えー、ここでニュースの時間です。一つ目は、明け方に線路上で爆発したかのようなあ  
とと、近くには巻き込まれたのか荷物が散乱していました。その荷物からは身分証明が  
できるものもあつたものの付近にその人物がいらないことから事件に巻き込まれたので  
はという警察からのことです。エツナニナニ。

えー、速報です。先ほどの新幹線事故についての被害者たちの名前が確認できまし  
た。行方不明者等も同様に掲載します」

そこには猩の名前があつた。

「いや。いやあ嘘だよ。ねえ、いやあ……」  
「いやあああああ!!!」

悲しみに塗れた叫びが聞こえた。

---

時はたち、数年後

「ここまで、数年。やっと元の世界に戻れる魔法具が完成したよ」  
「ほんと。ここまで長かったね」  
「最初この世界に来てどうなるかと思ったよな」

そう言うのは少し体格や顔つきが変った猩と猩と同じくらいの姿の女性がいた

「この世界にきて、辛いことや苦しいことがあつたけど、それを覆すかのように楽しい時間だったよな」

「まさか、最初の数人から二人だけになるなんてね。しかも場所もバラバラのところからっていうね」

「まあ、思いつくのもいいけど、最後の作業をして帰ろうか」

「そうだね、はやく家族のみんなに会いたいな」

「ああ、俺もそうだよ。父さんや母さん、姉ちゃんにも会いたいな。レンにも連絡とって、また遊びたいな」

「よし！ そしたらさっさと準備終わらせて帰ろうよ！」

「ああ、そうだな。やり残したこともないだろうし。帰ろう、俺たちの世界へ」

そういつて、丸い水晶のようなものに手をかざすと、水晶は光を帯び、二人を包み込んだ。

「そういや、俺たち名前しか言ってなかったな」

「そういえば、そうだったね〜でも元の世界で会えるのかな？」

だって飛ばされる前、

別々のところにいたんだよ？」

「まあ、そうだけど近場だった場合も考えて。な？」

「そうだね！ そうしよつか！」

「ああ、俺の名前は、丸山猩」

「私の名前はね、月島まりな！」

「なるほどな。ルナっていったのは月からとったんだな」

「そうだよ！ って猩君はシヨウでカタカナにしてたんだよね」

「そうそう、良い名前が思いつかなくてな〜」

そう話を進めていくと光がだんだんと強くなっていく

「…………そろそろ時間だな」

「……うんそうだね」

「元の世界でき、家族にあつて、まりな。君を探してみるよ」

「大丈夫だよ探さなくてもいつか会えると思うし!」

「まあそうだな、でもこうやってられるのも今だけかもしれないぞ?」

「その時はその時で、君が何かしてるんじゃないの?」

「まあ、ないこともないかな」

「ほら、大丈夫だよ!」

「元の世界でも会えるように、なんか渡せるものあるかな?」

「ん〜。私だったらアクセサリーにしとくかな?」

「そしたら、メンバーが持ってたコレでいいんじゃないか? 分かりやすいと思うぞ?」

　　そういつて取り出したのは、盾と剣が合わさっているかのようなアクセサリーを取り出した

「あ〜、メンバーの紋章ね! たしかにそれなら分かるよね! そうしよつか!」

そして、光が強くなり、まわりが見えなくなるほど輝きだした

「また、会おうな。まりな」

「猩君も、元気でね？」

そう言って拳をぶつけ合うと意識が浮かぶような感覚のあととともに世界から二人は消えた

## 異世界から飛び出し空のうえ!?

自分で作成し起動させた魔道具の光がだんだんとおさまってくる。

眩しく、目が開けられそうにない。

数秒後、光もおさまっていき、目を少しずつ開いていくと、そこには……

周りを埋め尽くすように視界いっぱい木々がうつついていた。そして、空を感じていたのだ。

「な、なんじゃこりゃあああ!!」シーン

誰でも辿りついた先がいきなりジャングルっぽいところにいるらびつくりするだろう。

しかも、空から落ちている

だが、それ以前に叫び声が1つしか聞こえないことに気づいてしまった。

「あれ? ルナ……じゃなかった。まりなはどこにいったんだ? さつきまで近くにいたはずなんだが……失敗したわけではないよな、俺がここにいるし……性別で左右するような代物でもないし……どこにいった?」

猩は周りを見渡しても、落ちているのは自分1人だけであった。



「ここどこだ？日本…だよな？じゃなかつたら厭しいぞ？これ…とりあえず周りの地形を知りたいな、そしたら…つとまず、浮遊魔法を使つてつと！」

現在落下中であつたが、浮遊魔法を使用し、地面に叩きつけられるということは、回避された。周囲を見渡すため、収納バックから自信の作品である機械仕掛けの魔道具を取り出した。その形は鳥のように2対の羽を持った機械であつた。

「よし、周囲見渡すなら視界共感可能な『シユバ』が最適だろうな…よし！飛べ、シユバ！」

シユバと呼ばれた機械は2対の羽を動かし空へ飛んでいく。その速さはハヤブサと呼ばれる鳥よりは遅いもの、充分な速さで空高く飛んで行つた。

「起動問題なし…つと。さて、視界共感して周囲見ようか」

そう言つて、左目に手をかざすと左目付近に円形の魔法陣が現れる

「よし、視界も良好。飛行も問題ない。燃料は…もともと俺の魔力からだから大丈夫。よし、周囲探索からかな…」

そして、シユバは猩の上を円を描くように飛行していたところから、この地全体を飛んでいくかのようにしたところ。空に飛んでいったところ。小さな小島が現在いるところであつた。吊り橋も一つかかつてあるが、その吊り橋は今にも崩れそうな風格をあらわしており、他にも少しあいたところに小さな小屋が一つぼつんと建つていた。

他に見るところもなく、周囲には他の島は少なくとも見える範囲にはない

猩はシユバを手元に戻そうとしたところ、ある方向から船が一隻、この島に着いていることに気がつく。

「この島に船が一隻着いてるな…もし、会うことができたら、今の場所と時刻を知りたいな。とりあえず、移動して近づいてみるか…つあ!」

そう言うのと、猩は気がついた。服装についてはまだあつちの世界のままだったことに。急いで収納バックから今の状況にあう服装と念のための武器を装備する

武器といっても剣や銃はヤバいだろうから、それに当てはまらないのを選出する。服装、赤いシャツに緑のズボン。それに膝近くまであるコートを羽織ることにした。

腰には、ベルトと鞭のためのホルダーもある。

「…よし…これで多分大丈夫だろう。とりあえず吊り橋目指さないとな、じゃないと砂浜までいけそうにないし…」

そうして、移動しようとして武器を取り出し、木の丈夫な枝に自身の武器を巻き付け移動しはじめる。

木から木へとぶら下がり高速で移動していく。

すると、近くに川が流れているところに近づいてきた。

少し喉が乾いていた猩は川の水を飲もうと川辺に近づいて飲みはじめる

ゴクゴク

「プハア……。とりあえず日がのぼってるうちに誰か人と会いたいなあ。……つあ、吊り橋」  
太陽を見てそう言うのと視界に吊り橋が目につる。

そうこうしていると、どこからか声が聞こえてくる。その声を聞こうと聴力をあげる  
魔道具（耳飾り）をつけた。

「ひ、日菜ちゃん！ゆ、揺らさないで〜！」

「るんっ♪て、きたあ〜!!」

「あ、彩さん！落ち着いてくださいー！」

「チサトさん！下に川が流れてますよー！」

「い、イヴちゃん、あまり下を見ない方がいいわよ」

なにやら、上の吊り橋のところに少なくとも5人いるようだった。

懐かしい声が聞こえ、この崖を上りきろうとした、そのとき

「きゃっ！……えっ？」バキバキ

「ち、千聖さん！」

何やら、木が砕けるような、そんな音と共に木の板が、空から落ちてきた。

落ちてきた方向に目を向けると……

一部壊れた吊り橋と壊れた足場に捕まってぶら下がっている人がいた。

高さもビル何階建てなのか分からないが

まだ、川に深さがあれば助かるかもしれない。だが、川は腰より、高い水位しかない。落ちたらまず、この低い水位の川に叩きつけられて助からないだろう

「千聖ちゃん！待ってて今助けるから！」

「チサトさん、手助けします！」

「ふ、二人ともそんなに急ぐとまた揺れてって…わあ！」

また、吊り橋は揺れはじめ、何かビククリする声とともに、《ぶら下がっている状態の人》が手が離れて、落下しはじめる。

「ぎゃああああ!!」

「さすがにこれはヤバイな。とりあえずっと」

猩は急いで跳躍強化魔法を使用する。

そして、もう半分まで落ちてきた人のところまで跳んでいく。

そして、落ちてきた人を両腕で抱きしめ、地面に着地する。

「よっと、おい！君大丈夫か!？」

「……………」

「反応がないが、気絶してしまったか…まあ仕方ないだろ。まさか、あそこで落ちるとも

思つてなかつただろうし。とりあえず気がつくまで、休ませるか……」

そこで猩はまるでリクライニングシートのような横になれる椅子を取り出し、その女性を横たわらせた。

「起き上がるのを待つ前に、上の人たちに無事を知らせないとな。シユバ！この手紙を上の人たちに渡してくれ。」

そういつて、戻し忘れていたシユバを飛ばし。少女が起き上がるまで、食事の準備をし、待つことに決めたのだった……

気づいて…気づきたくなくて……

「っん……ここは……」

「お？ 目を覚ましたか？」

橋から落ちてきた少女が目を覚ましたようだ

「え、ええ。ここは……どこかしら？」

「ん？ ここか。橋の真下にある川沿いだよ。君、あの橋から落ちてきたからね。怪我等ない？ 気分とか」

「そうだわ！ 私、吊り橋から落ちて……」

そう言つて、少女は自分の身体に目を向け、異変がないかを確認していた。

異常はなかったようでホツとした表情をするが、猩が見ているのが目に入ると少しびつくりした表情をしたが、すぐ表情を通常に戻した。

「うん、傷なさそうだね。良かった……」

「ええ。心配してくださりありがとうございます」

「一応、上にいた子たちにもメモ残してあるから。これ食べてから目的地まで送るよ」「いえ、そこまで迷惑をかけるわけにもいきませんので……」

「大丈夫だよ、そこまで気にしてないから。それに1人で目的地まで行き着けるの?」

「……………そうですね、すいませんお願いします」

「うんうん、そうしたらさっさと軽い食事をとったら……目的地……」

「あつ、目的地ですが、吊り橋の先にある花畑です。それと……」

「ん? どうしたのかな?」

「お名前、聞かせてもらつてよろしいでしょうか?」

「ああ、そういえば自己紹介しなかつたな俺は……猩。よろしくな」

「私はP a s t e l \* P a l e t t e sのギター担当、白鷺千聖です。よろしくお願

します。 猩さん」

「パステル……パレット……ギター担当ってことは。バンドかな？」

「……ええ、それとーついいかしら？」

「うん、俺もーつ聞きたいことがあるんだ」

「なら、私から失礼するわね」

千聖は、まるで店員がしてる客に見せるような作られた笑顔から真剣な表情になっていた。ここまでは友人と話すような気楽だったが、これからは刑事のように鋭く何かに気づきそれを叩き込むように……

「あなたは何故貸し切りにされてるこの無人島にいるの？」

「……………」

そう、この場所に部外者である猩がいることに疑問をこの千聖は今まで持っていた



のだった。

「答えてもらえるかしら？ 猩君」

「ねえ、千聖。年月つて残酷だと思わないか……」

「？ いきなりどうしたのよ。それより質問に……」

「実は俺はここにいつのまにか来てたんだ」

「!？」

俺は空を見上げながら、そう言い始めた。空高くには身を覚えのある鳥に何かくつついていることが猩の目にはいつてくる。そして、会話を続ける

「だから、どうしてここにいるのかも分からない。そして、今日日にちすらも分からなかった」

そうやって、手を空に向かい上げると、飛んでいた鳥が一直線に猩の上げた手に向かって降りてきた。鳥は優しく猩の腕に着地をする。そして、鳥にくつついていた……いや、持たされていたのはカメラであった。

「俺さ、この鳥。シュバって名前なんだが、自宅に飛ばしたんだよ。そしたらさ……こんなことってあるんだな……」

「このカメラに写ってるものって、見してもらっても？」

「ああ、構わないよ」

そうやって、千聖はシュバからカメラを受け取り内容を確認する。すると、1つの民家が写っていた。そこから進めていくと気になる写真があったのだ。

「ねえ……これって……」

千聖が見ているのは2人の大人の男女。夫婦だろう。その夫婦の目線の先には少し幼い顔をし、笑顔が綺麗な男の子の写真であった。夫婦は手を合わせて涙を流していたのだ。

「その写真の男の子が俺だよ……さすがに3年とちよつとの時間行方不明になってたらな……分かつてはいたけど期待したかった」

「…………ごめんなさい」

「気にしないでくれ。一露の希望だったからな。両親と姉ちゃんが元気そうで良かったしな……とりあえず、あとはもう1人探さないといけないんだ」

「あなたがこの島にいたのも分かったわ、それで私に聞きたいのはその『もう1人の探し人』なのよね」

「ああ、もし知っていたら教えて欲しいんだが、月島まりなって女の人を知らないか？」

「まりなさん？ それだったら知ってるわよ」

「良かった……すまないがどこにいるのか分かるか？ とりあえず会う約束をしているんだ」

「ええ、なにかメモを持ってないかしら？　そこに住所を書くから」

「そうしたら……この紙を使ってくれ。これだったら大丈夫だからな」

「ええ、ありがとうございます」

そうして、千聖は月島まりなの居場所をメモに書きだした。綺麗で整った字が並びだし、住所が記入されていく。

「これがまりなさんのよくいる場所よ」

「ここにルナが……」ボソツ

「ん？　何か言ったかしら？」

「いや、なんでもない。教えてくれてありがとう。あとは千聖、君を花畑に案内だったよな」

「ええ、お願いするわ。でも、猩君。まりなさんにあつたあとどうするのよ？」

「一応あてはあるから、それに期待かな」

「そう……」

そうやって、千聖と猩は花畑に向かい歩き出す。その間にも何気ない会話をしていた。川のあつた道から上に登り、吊り橋を渡り、もう少しで花畑に着くとき、横道の木々が、大きく揺れ、へし折れる。

折れた木々から顔を出したのは大きな熊だった……

熊、熊、熊!と場所が飛んでの……ナニゴト!?

「く、熊!? 何でこんなところに……」

「千聖、落ちて着いて熊から目を離さずに、俺の背中にこれるか?」

「え、ええ。でも熊と遭遇した場合、死んだフリでやり過ごすって聞いたけど」

「それはほんの一握りかもしれない。熊とあつた場合は目を逸らさず。ゆつくりと視界から外れるのがたやすい。だが、相手……熊が攻撃的だったり、空腹のときは……どれも効果が薄いことがある。だからこそ、ゆつくりこつちにきてもらったんだ」

ゆつくりとした動きで猩の後ろに回り込む千聖。熊を見ながらなので繊細な動き……まるで針に糸を通すかのよう……

「それで、貴方の後ろにいる私は何をすればいいのかしら」

「後ろにきたな、ならこれ持って身に付けてそのまま花畑の所に向かっていくんだ」

「それで、貴方はどうするつもり？ まさか……熊を相手するとか言わないわよね？」

「必要なら相手をするが、そうならないためにここは、俺に任せていつてくれ」

「本当に……大丈夫なのよね？」

「すまないが嘘は1個人と1回しかついたことないんだ……」

「……その人、絶対貴方を恨んでるわよ」

「そんな軽口叩けるなら、大丈夫だな。さあ、これをさっさと受け取って行ってくれ」

猩が千聖に渡そうとしているのはネックレスのようだ。銀製の鎖に繋がれている円盤に取手が付いているものであった。

千聖は細かい部分は見ずに、さっさとそのネックレスを受け取り、自身の首に身に付けた。

「たしかに受け取ったわ」

「オツケー、なら少し早めに動いた方がいい。そろそろ相手の熊も待ちきれないようだ」

「ねえ、また会えるかしら？」

「生きてりや会えるだろ。まあ、近いうちにまりなんとか行くからな。近辺にいれば高

い確率で会えるだろうな」

「そう……ありがとう。ここは任せるわね」

「おう、あとは相手を刺激しないように花畑に向かっていくんだぞ」

「さすがに分かっているわよ」

そうして、後ろにいた千聖の気配はゆっくりとゆっくりと狸から離れ、花畑の方へ向かっていった。

だがしかし、運が悪いのか状況は変化する。それはたった一本の木の枝によって……

「……………あつ」パキッ

それは小さな音であったが、千聖は木の枝を踏み折ってしまったのだ。

千聖は足元を確認したあと、熊に視線を向けると、今にも熊は千聖に目を向け、涎を垂らしていた。どちらから食べるか悩んでいてたところ音になった。熊は千聖から食べることを決めたようだった。



「千聖！ 熊がターゲットしてる！ 走って逃げろ！」

「え、ええ！」

千聖に狙いを定めたことに気づいた猩は、千聖に速く逃がそうと熊に一步近づく。千聖は急いで逃げるために、背を向け走りだす。

すると……

走り出した千聖の顔の横に勢いよく飛んでくる。千聖はその飛んできたモノを見ると、その物体は人ではなかったが人の一部であった腕であった。

「えっ？」

千聖は動きを止めず、振り返るとそこには……右腕を無くした猩と腕を振りかざしたあとの熊が相対していたのだった……

そして、千聖は戻ろうとした瞬間

「大丈夫、ここは俺に任せて行ってくれ! きつとまた……会えるから!!」

千聖はその言葉を聞き、2度と振り返ることはなかった。そのまま走り去り、熊の視界から外れたようだ。

「……さて、そろそろ千聖も視界から外れたみたいだからな」

そう言いながら、熊の振り下ろした腕をバックステップで離れる。そして、体の左側に魔法陣を出し、そこに左腕を突っ込み何かを引き出す。それは両手を肘と肘をくっつけた金属物であった。左手の方は空洞があり、そのままはめられる構造になっていた。そして、右手の方は空洞が少ししかなくまるで、空気孔のようだった。中身もしっかり詰まっっていて、まるで右腕が取れることを想像し、作成されたかのように……

そして、両腕にその金属物をはめ、打ち鳴らす。辺りに反響する音に熊は反応し、再度、猩にその剛腕を振るおうとした時……

熊は空を飛び、飛び出していた木の枝に突き刺さる。熊が最期に見たのは、右腕をこち

らに真つ直ぐに伸ばしていた姿だった。

「あつ……やべつ……回収できるかな？」

そういい近づき、回収しようとするが遠くの方から多くの人の声が聞こえてくる。猩は熊を回収することを諦め、その場を後にし、目的地に向かいはじめるのだった。

その後、大勢の人、撮影スタッフの方から千聖に熊はいたが人はいなかったとの連絡されたのだった……

その数日後、とある駅前にて狸がとある少年に抱きつかれていたのだった。その少年は涙を流しながら話始める。その少年は、少し青緑がかった髪色と低めの身長をしており、背中には身体と同じくらいの何かを背負っていた。

「おにいさん……会いたかったよっ……!!」

「えっと……たしか……○○……だよな？」

「おにいさんっ……!おにいさんっ!」

## 近づくと影と襲われて

「おにいさん……会いたかったよっ……!!」

「えっと……たしか……コウ……だよな？」

「おにいさんっ……!! おにいさんっ!!」

俺の腰に抱きついてきたのは氷川 恋という。同い年でゲーム仲間であった。

身長は低めで声も少し高い……男であった。

涙目で俺に抱きついて、少しキュンとなる……男の子だ。

「レン。久しぶりだな！ 元気だったか？」

「さつきまで元気じゃなかったけど……今、すつごく元気になれたよ。おにいさん！」

「そっかそっか……ごめんな、あの時、約束守れなくて……」

「ううん……僕はおにいさんが生きててくれるだけで、嬉しいよ……約束ならまたすれ

ばいいし……ね？」

「ああ……そうだな……」

「おにいさん、今日このあと暇？」

「ん？ 一応この住所の場所に予定はあるけど……どうかしたのか？」

「えつとね、実は……」

恋が抱きつきながら話していると、狸の背中に殺気だてた、誰かが殴りかかってきた。それは狸の頭部を狙っていたが、狸はその攻撃を見ていないのにもかかわらず、恋を持ち、軽くその場でターンをして避けたのだった。攻撃してきたのは太陽に反射し、光り輝くかのような長い金髪を、後ろを『見覚えのあるリボン』で纏めた、高身長な女性だった。

「いきなり、攻撃してきてどうしたんだ？」

「……その子を離しなさい。まだ、1発だけで許すわよ？」

「1発って……あのなあ、俺は……」

「3」

「おいおい、話ぐらい……」

「2」

「おい、聞けつて……」

「1!」ブンツ!

「おっと、あぶなつ!」

その女性は1のタイミングでまた顔を狙い殴りかかってくるが、腰を掴んでいる恋を怪我させないように、自分の右後ろに隠し、左手でうまく流した……

「おい、恋にあたつたらどうするんだよ」

「黙りなさいっ! さっさと恋を離しなさい! 恋、すぐ助けるから……ねっ!」

「ま、待つてくださいつミコト……」

恋が何か聞き覚えのある言葉を言おうとしていたが、それは女性によつて遮られる。もう、この女性と対義しなさいといけないのかと考えた……その時、周りを見ると『黒い服を纏つた男性集団』が俺たちを囲うかのようにたつていた。

「おい、これどういうことだ?」

「っあ……ヤバツ……」

「さて、まさか……」

「……」 プイツ

「こつちを見ろよ」

「……」

「……」

すぐに分かることだが、この囲まれている状況は、対義している女性のせいなんだろう……今も絶えず汗を流し続けている女性はさすがに逃げることはできないだろう……

「さて、その兄ちゃんよお、その女渡してもらおうか？」

「別に構わないが、せめて何があったかぐらい聞かせてもらっても？」

「ちよつ、ちよつと！」

「その女はね、ちよくと親にされたことを報復しにきたのよ。しかも1人でね？」

「まさか、ゴミ箱に蹴り飛ばされるとはな」

「お前な……そんなことしてたのか……」

「あんたたちが悪いんじゃないっ！ お父様の仕事の邪魔をして！」

「邪魔？ 邪魔されたのはこつちの方だぜ？ 嬢ちゃんよ」



「どうせ、今回の話に付き合わされなかったっていう、くだらない話でしょ！」  
「あんたにとつては、くだらないかもしれないかもしれんがな……」

黒服の男はそういういながら、内ポケットに手をいれ、そこから取り出したのは……短刀だった……

「っ!!」

「俺たちにとつちやあ、大事だったんよお!!」

そのまま黒服の男は走り出し、女性に向かって走り出してきた。女性は、短刀にびつくりしたのか、動かなかった……

短刀はそのまま女性に刺さる………

パシッ………

「おいおい、兄ちゃんよお。なんの真似だあ？」

「別に、ただ気に入らない……そう思っただけだか？」

「兄ちゃんよお、この手、離してくれよ、なあ？」

「なあ、恋。この女性と一緒にいてくれるか？」

「う、うん！ ミコトさん！」

「え、ええ……」

「離せつて……いつてんだろがああああ!!」

恋がミコトのそばによったことを確認すると、黒服は無視されたのが尺に触れたのか、逆上しながら、短刀を猩の体に刺そうとしてくるが、猩はその短刀を振るわれた腕を左手で掴むとそのまま片手で背負い投げだのだった。

「痛たたたつ！ 離せ兄ちゃんよお！ おい小僧離せつて！」

「せめて、凶器を振るわなければ特に何もなかった。他人であれば、多少スルーしてたかもしれないな……」

「おい、何を……!!？」

「おまけもつけて、それじゃあな!!」

「あああああ!!」

そういいながら黒服を投げ飛ばす。その先にはゴミ箱があり、綺麗に頭から突っ込んでいった。その時、少しだが黒服の体に極小の魔法陣がついていた。

「よし、これでいいな。恋お待たせ……つと」

「お兄さん……もう危ないことしないで……」

「……ああ。ごめんな恋」

「ううん、大丈夫だよ……」

「ミコトも無事だったか？」

「ええ、助けてくれてありがとう……ええつと……」

「ん？ ああ、まだ気づいてないか。久しぶり、メイさん……」

「メイって私の……名……前……は……え？」

「ただいま……恋はすぐ分かってくれたからびっくりしたよ」

「もしかして……猩……？」

「うん」

「……………!!」

ミコトと呼ばれた女性は、弦巻 命。弦巻財閥の長女であった。であつたきつかけは恋と一緒に遊んでいたところ、1人だったミコトを発見↓一緒に遊ぶ。ということである。彼女はいつも、弦巻財閥の名によつて、近づいてくる人を敵視していたが、恋によつて心を開いてくれた…………

その命は目尻に涙を溜め、抱きついてきた。

「猩……………なんだよね……………」

「ああ……………」

「生きててくれて……………良かった……………本当に良かった……………!」ボロボロ

命は猩を抱きしめ、涙を流していた。

はじめての2人の大切な親友……………その片方が行方不明になつていたとニュースでやっていたことで不安がっていた。理解していた。でも、理解しなくなかつた。ずっと

繰り返していた時。恋とあったのだ。恋は強かったのだ。きっと生きてるって思い続け、命もその支えによって無事だったのだ。そう、行方不明……それなら生きてるって信じていよう……そう思い続けること胸にひめて……

だが、騒ぎを起こしたからか、周りが騒々しくなってきた。

「あー……悪いんだが、少し移動しよう。ここまで騒いだら……な？」

「そうね、そうしたら……私の家で何か飲みながら話しましょう」

「恋も一緒にな？」

「当たり前じゃない！ 話したいこと。いっぱい、いくつばいあるんだから！ 恋行きましょー！」

「はい！ おにいさんっ！ ミコトさん！」

そう言って、ミコトの左手に恋と繋ぎ、右手には猩の左手を繋ぎ移動しだす。移動してる時、3人は笑顔が止むことがなかった……

# シェアハンド!シェアハウス!/?そして仲間たち!!

あのあと、猩たちはとある一軒家の前にたたずんでいた。

「それで…あのままここに連れて来られたわけだが。」

「ええ、そうね。」

「いつものあのデカイ屋敷に連れられると思ったが、なんで…」

『今は』「ここが私の…私達の家よ」

『今は』「……ね?まあ、いいけど恋の他にも、あの3人とも一緒なのか?」

「ええ、あのあとどのメンバーもイザゴザがあつてね…まあ、私の場合は元々こうする予定だったからね。ならメンバーの全員集まっていた方が都合がいいもの。」

「まあ、どのメンバーも家族と仲悪かったもんな……。まあ、俺は指導する側だったからな。」

「で、でも!おにいさんがいたから僕たち頑張れたんだよ!おにいさんがいなかったら、まず演奏をしようって思わなかったもの!」

「まあ、ちようど集まっていたメンバーが偶々別々な担当で、偶々俺が指導できていたか

らだ……」

「それでも、その時は貴方しかいなかった……それは偶然だったのかしら？それとも奇跡かしら？私はそう思わないわ。」

「偶然でも、奇跡でもないなら……必然か？」

「ええ。私たちは出会うべくして出会った。そう感じたわ。」

「僕たち、あのままだったら……本当に取り返しのつかないとこまでいったかもしれないし……」

「あのままだったら……か……」

「そういい、出会ったことを思い出そうとしたところ。玄関の扉が勢いよく開く。

そこから飛び出してきたのは、恋と同等の身長をし、金色の長い髪を振り回しながらこちらに突っ込んでくる少女がいた。

その後ろからは少し大人びた茶髪の男性と、ガタイのいい、身長高めの黒髪の男性が見えた。

「猩くうーん!!お待ちしてましたあ!!」

「はいはい、落ち着け落ち着け」

「猩さんだあ！本当の猩くんだああ!!」

「あらあら、すごく懐かれてるじゃない猩。」

「なんでこんなに懐かれてるんだ? 覚えてる限りじゃ、すごく威嚇的だったんだが……」

「ええ、合っているわよ。それで。」

「なら、なんで?」

「それはね……」

「おにいさんが急にいなくなっただけからなのです。」

「へ?」

「威嚇的だったのは、好意があつたのを隠そうと……まあ照れ隠しですね……」

「もう、やめてよ。恋く〜ん。あまり昔のこと話さないで欲しいなく私は。」

「まあ、いいか。それで、お前たちもこいよ。」

「ああ、久しぶりだな、猩。」

「久しぶりってより、おかえりって言ったほうがいいんじゃないか?」

「まあ、とりあえず会えて良かったよ。」

「無事で良かったし、これからまた、日常続けてけばいいだろ!」

「あ、そのことなんだが……なあ命。1つ頼みがあるんだけど。」

「あら? どうしたの?」

「黒服を1人、借りてもいいか? やっておきたいことがあるんだ。」



「別に構わないけど、私たちも手伝うわよ?」

「いや、これは俺自身でやらないといけなあからな。それに、今やらないとこれから俺が困っちゃうし……」

「そういうことか、猩」

「素晴らしいながら茶髪の男性は近寄ってくる。他の人物はまだ気付いていなかった。

「社（やしろ）は気づいてたか。まあさすがにこのままだと、どこにもいけないからな……」

「このままだと、動けない? おにいさんは足に怪我でもしたんですか?」

「とりあえず、今の世間では俺は死人だぜ? だから、黒服さんについてきてもらって、自分の別戸籍を用意してもらいたいんだ。さすがにこのままだと何もできないからな……」

「ふーん。したららお店とか何か開くのかしら? そのための資金も必要よ? 私も……いえ、私たちも手伝いたいけれどそこまでの資金は……」

「資金に関しては、多分大丈夫だろう。それについては、対策はある。あとは自由に動けるように戸籍が欲しかったんだ。だかは黒服さんを一人手伝ってほしいと頼んだんだ。」

「そう、なら一人貴方に同行させるわ。でも戸籍できて、資金ができなかったらこの家に

戻ってきなさい。ここは…：猩の帰るための1つの家でもあるのだから。」

「……ありがとう、命…：みんな。」

「さて、とりあえずはこれで辛気臭い話は終わり。ご飯にしましよ!」

「了解です!猩くんも一緒にいきましょ!社「やしろ」くんのご飯とても美味しいんですよ!」

「俺だけじゃなく、紅「こう」、お前のも美味いからな?命のほうも最近では、お菓子等も作ることもできてきてるしな」

「そうだったんだな…：そしたら俺も何か作っておいた方がいいかな?また、このメンバーに会えたし…：祝いとしてだな。」

「え!?猩くんも料理を作るんですか!?!是非是非食べたいです!私!!」

「猩も作れるのね…：そしたら、今日は社と猩の2人に料理を任せるわ。」

「分かった…：とりあえず、何食べたいか聞いてもいいか?それで作っていくからさ。」

「そうね…：私は、ハンバーグかしら。」

「僕は…：カレーを食べたいですね。」

「私は猩くんと、社さんの作るものならなんでも!」

「…：俺はみんなに合わせる。ただ、デザートにプリンがあればいい。」

「ふむ、ハンバーグにカレー。それにプリンか…：そしたらプリンとカレーは俺やるから、

社はハンバーグを頼む。多分大量に必要なだろう？プリンは1人1つにしとけば簡単だしな。」

「オツケー！ならハンバーグは……10個位あれば大丈夫かな？」

「全然大丈夫だろう。さて作り始めるか。」

そうして、狸たちは食事会を始める

今まで会えていなかった分、たくさん話をし、たくさん話を聞き……

笑いあいながら、楽しい時間を過ごしていたのだった。

楽しい食事も終わり、食器を洗おうとした狸だったが、命に止められ、恋と夕世の2人がやることになった。

テーブルについて、コーヒーを飲みながらみんなテレビを見てみると、パスパレの番組が始まっていた。

「あつ、日菜姉さんたちだ。パスパレのみんなも集まってるんだなく珍しい。」

「そういえば、狸も姉ちゃんいたよな？たしか……そうそう！」

「パスパレの彩ちゃん!」

「みなさんこんにちにはー!まんまるお山に彩りを!丸山彩でーす!」

「彩ちゃんだったよな?」

そう声が聞こえると同時に彩姉さんの自己紹介が聞こえてきた。

「そーいや、猩。お前、なんで夏なのに長袖で、片手袋なんだ?」

「ん?ああ、これ実はさ。義手なんだよな。」

「へ?えええええ!!?」

## 設定!!

丸山 猩（まるやま しょう）

丸山彩の弟だった。

現在、初谷 真澄（はつや ますみ）

という名前で行動中。頭脳に関しては今のところ、地理問題以外は理解可能。

U & amp ; Dのメンバーの1人であるが、やるパートは全体である。

服装は長袖で片手袋（右手）、

背は彩と同じで、髪色は白に限りなく近いピンク……白桃色だったが、染色し黒髪で毛先に白桃色にした。

眼の色、左がダークレッド。右が薄鼠色。元々両眼はダークレッドだった。背は156cm。

好きな食べ物 タコ

嫌いな食べ物 ない

弦巻 命（つるまき みこと）

弦巻こころの姉。

弦巻財閥の娘。U & Dのボーカル担当。

弦巻財閥の娘だが、ルームシェアして、現在メンバーたちと同居中。

背は165cm。髪の色はゴールドで毛先3cmほどがシルバー。眼の色は、シル

バー  
好きな食べ物 ない

嫌いな食べ物 高いもの（食べれないわけではない）

氷川 恋（ひかわ れん）

氷川紗夜と氷川日菜の弟。U & a m p ; Dのギター担当。ギターの色は翠色で51の  
白文字が書かれている。弦巻命のルームを借りて同居中。

背は160cm。髪の色はライトグリーン。眼の色は翠色。

好きな食べ物 米

嫌いな食べ物 味の濃いもの

市ヶ谷 紅（いちがや こう）

市ヶ谷有咲の姉。U & a m p ; Dのキーボード担当。キーボードを白桃色に染めて、

○と△でペイントしている。

背は158cm。髪の色は金髪。眼の色は蒼色。

好きな食べ物 オレンジ

嫌いな食べ物 スイカ

今井 社（いまい やしろ）

今井リサの兄。U & amp; P; Dのベース担当。ベースは、紫と赤でハーフになっている。背は170cm。髪の色は茶髪で長い髪を後ろでひと纏りにしている。眼の色は白色。

好きな食べ物

渋谷 夕也（しづや ゆうや）

A f t e r g l o wの幼なじみ。U & amp; P; Dのドラム担当。ドラムのバチは誕生日にA f t e r g l o wのみんなからもらったのを使用中。背は178cm。髪の色は焦げ茶色。眼の色は黒。

U & amp; P; Dについて

これは、メンバーに兄弟姉妹がいることか参加条件となっている。カバー曲は多目だが、オリジナル曲もある……

オリジナル曲

「キミがいなくてワタシは……」

パレード曲となっており、猩がいなくなつてから、紅が泣きながら1日中書き続け、作詞した。そのあと、曲にしようとしてメロディもつけ始めた。

「昔の君の笑顔」

社が作詞作曲したもので、静かながら激しくなる曲。昔の友希那とリサを思つて書いたらしい。

「C. T! Dream!!」

命が作つた曲。妹のこころの夢を聞いて作つた。C. Tとはcome trueの略で、夢叶うという、思いを込めた曲である。

「交差する2つのオモイ」

恋が作詞した曲。姉の紗夜と日菜が仲良くなつてほしいと思ひ作つた。だがしかし、この曲はその2人とメンバーしか聞いたことがない。

この4曲のみである。夕也と猩はまだ作詞作曲まではやってはいない。夕也の場合まだ手付かずで、猩の場合は手を付け始めたあたりである。



## C i R C l E 前 に 到 達 ？

あの日から2日たった。

俺は丸山狸から初谷真澄という名前に変更し、商店街近くにて空き地があったためそこを契約し、即座に家を建築させる。

「でも、夕也があそこまで感情的になるとはな……」

「それ????????????????」

「二籍作って、家借りるか買ってそこから……職探しになるかな？」  
「そういうことじゃないと思うわ、狸」

「……彩ねえについてかな？ それなら今会うわけにはいかないよ。会っちゃいけない」

「何でだよっ……!!」

「夕也……分かってくれ」

「猩！ お前は生きてた、生きて帰ってこれた！ それで家族に会う！ それじゃあ、駄

目なのかよ!!」

「夕也さん……気持ちには分かります。私もすっごく嬉しいです。ですけど……」

興奮する夕也に猩はなだめようとするが夕也は止まらない。

紅はそう言いながら、少し言いづらそうにしている。すると……

「生きてた、それで元の鞄に戻してはいおしまいって訳にもいかないのよ、現実は……」  
「だからって!!」

「私のお父様の権力ちからがあれば、それを覆すことができるわ。でも、そうしたら私は今の生活いを終わらせないとはいけないの、そういう約束なの……」

「そんなのって！ そんなのってあんまりだろ!？」

「夕也、俺はもう納得はしてるんだ。だから戸籍を作ることに決めたんだよ」

「……っ!!」

「夕也っ……」

「夕也にも譲れないものだってあるし、貴方自身譲れないものがあるから、そうするのよ  
ね?」

「……ああ」

「なら、私はこれ以上話す必要はないと思うわ……みんなもいいわね」

そういうと、少しの間を挟んで紅が口を開く。

「猩さん、それで新しい名前決めたんですか?」

「ああ、決めたよ。元々考えてはいたんだ。名前は初谷真澄。あの時死んだ俺が目覚めたのは、深い……深い谷だったからな。それから……」

そのあとの『真澄』にした理由を話すことはなかった。猩自身、この理由を話すこともなかった。この先、この名の理由を知るものは2人しかいない。

????????????????????

「まあ、名前を変えただけでそれ以上変わったことはないが……」

　　そう言いながら、部屋の中を整理している。

　　家の構造として、三階建てで、一階が仕事場。二階が自宅。三階は……秘密にしておこう。

「そーいや、まだルナんとかいってなかったな……場所も調べてないからこころへんま

わりながらいくか……たしかメモはここらへん……つと、あつたあつた」

そうして、あの時もらったメモに目をおし、場所を調べる。

「え〜つと、『ライブハウスC i R C I E』で地図……現在地……つて、この道をまつすぐなのか。なら大丈夫か、その帰りに商店街で必要なもん揃えておけばいいしな。まあ、そこまで多くないし、歩きでいくか」

そうして、真澄は家を出発する。

家を出て、商店街を歩いていた真澄。  
そこでは、朝から少し賑わっていた。

「ここらへん、いい香りがするな。揚げ物の香り。コーヒーの香り。パンの香りとか。

今度、ここで買い物しようかな……朝食とかに良さそうだしな」

そんな事を考えながら、商店街を通り過ぎ、とうとうC i R C I Eの前のカフェに着く。

「えーつと、C i R C I Eの開店時間は……あと数十分あるのか、そしたら、ここで軽く待つとするか……」

そうして、C i R C I E前のカフェにて、注文をする。

「いらつしやいませ〜」

「すいません、コーヒー1つで。砂糖2のミルク1をお願いします」

「はい、ご注文はコーヒー1つ。砂糖2ミルク1ですね？」

「あ、フルーツタルト追加で」

「了解しました。フルーツタルト1、コーヒー砂糖2ミルク1、以上でよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「こちら2点で500円になります」

そうして、フルーツタルトを食べ終え、コーヒーを飲み時間を潰していると、隣の席に1人の女性が座る。

「……………」

「……………」

無言の時間が続く。その女性は大人の雰囲気を出しながら、こちらをずっと見続けている。どこかで似たような雰囲気を感じている。

「ねえ、キミ。1ついいかな？」

女性から話をかけられる。

どこか、怒りを少し感じるが、喜びも少なくはない。

「もしかして、シヨウ……であつてるよね？」

俺はこの女性をルナだと瞬間に気付いた。

「ルナ……だよな？」

「やっぱり！ シヨウじゃん、よかつた〜」

「でもなんで、そんなにと……」

その先の言葉が続けようとしたら、俺は。瞬間、座りながら、天地が逆さまに変わった。



ねえ？知ってる？○○○○を切れるんだよ？

「ルナ……だよな？」

「やっぱり！シヨウじゃん、よかった〜！」

「ルナだったか……でもなんで、そんなにと……」

その先の言葉を続けようとしたら、俺は。瞬間、座りながら、天地が逆さまに変わった。

いきなり、景色が変わったことに驚くが条件反射だろうか、地面に片手をつけ、そのまま回転し、両足で着地に成功した。

「あ、あぶなっ!?!何があつたんだ!?!」

そして、自分の座っていたモノを見ると4本脚のうち後ろ脚の部分が一部切り離されていた。そして、その近くには銀色に光るナニカが地面に突き刺さっていた。

「……あのさ、ルナ……さすがにナイフは危なくないか?」

「え?【ナイフ】は使つてないよ?」

「いや、あれはナイフじゃ……あれ?」

テーブルの上を見ると、自分が頼んだ珈琲とフルーツタルト、ルナが頼んだと思われる紅茶とホットケーキ。そこにはナイフ2本、マドラー2本、使い終わった砂糖やミルク、そして使用済みのバター。

「え?じゃあ突き刺さってるアレはなんだ?」

真澄は近づいていき、その銀色のナニカを引き抜き、その全体を見ると食パンとかでマーガリンを塗るときに使うバターナイフであった。

「バター……ナイフ?なんでこんなにも鋭いんだ?」

「ねえ?知ってる?」

「ん?」

「バターナイフで銃弾は切れるんだよ？」

「……………」

「え？」

「バターナイフで銃弾は切れるんだよ？」

「いや、聞こえてたからな？え？本当に銃弾切れるのか？」

「これ見れば分かるでしょ？」

そう言って渡されたスマホに動画が流されていた。

固定されたバターナイフに向けて、小型拳銃で撃ち込んで銃弾が真つ二つになっていた。

「本当だな…じゃあ、あのバターナイフはどこから…!？」

その続きを言おうとすると、寒気が増大した。それはまるで凍土に防寒着無しでたたずむような…

「る…ルナ?その殺気を引つ込めてくれるか?さすがに寒気が止まらなくなって…」  
「ねえ……」

「な、なに?」

「さつきさ…『でもなんで、そんなにと』って言ってたけど、続き…なんて言いかけたの  
カナ?お姉さんに教えてもらえるカナ?」

「何も言っていないです…」

「ん?」

「駅前の人気店スイーツで勘弁してくれ……」

「ん…まあ、今回はそれでいいけど……」

ルナの目から「次はない」と言われた気がした。

「それで、そっちは今サークル?で仕事してるんだっけ?」

「まあ、そうだね。とりあえず合流するまで続けようとしてたけど、この仕事すごく気に入っちゃってね…」

「まあ、自分のしたいようにすればいいさ。これからも…な。」

「そっちは何か見つけたの?」

「とりあえず、こつちでは戸籍作って名前変えたつてとこかな。それで家で仕事できたらな〜つて。あ、名前だけど初谷真澄にしたから、これ連絡先な。」

「んー。前からアクセサリーとかフィギュア作るの上手かつたから、それを仕事にするのもありかもね。今、そういうの増えてるし。」

「なるほどな…：そこも確かめながらやつてくか……」

「まあ、こつちの仕事したかつたらいつてね。こつちは人数不足気味だしね〜」

「そうだったのか…：手伝いくらいなら言ってくれな？」

「うん、ありがとね〜」

「これから調べないといけないことも増えたしな、もしかしたら……」

「ん？何かいった？」

「いや、気にしないでくれ。あと、俺のことは…：秘密にしといてくれな。」

「もしかして…」

「これは、これからを考えて決めたことだ、かえるつもりもない。」

「……：そう…：だね。そつちも困つたとき連絡ちようだいね？」

「ああ、分かつてる。」ドンッ

「……：すいません、失礼しました……」

「いや、大丈夫だ。そつちは……」

「……」

そのまま解散するかと思いい、席を離れようとし、立ち上がると後ろを急いで通ろうとした人物とぶつかった…

相手は、謝罪すると急いでこの場を俯きながら離れていく。

真澄はそれを眺めていた。

すると、まりなが口を開く。

「今のって…紗夜ちゃん?でも、Roseliaは今練習中だったはず…」

「……」

「どうしたんだろ?」

「ルナ…いや、まりな。今のやつさ」

「Roseliaっていう、ガールズバンドのギター、氷川紗夜って言って、すごく真面目な人なんだけど……」

「今の見たか?」

「見たって…何が?」

「見てないならいいが…前見たときもつと髪が短かったはずだが…」

「髪が短い…あ、それ、双子の妹の氷川日菜ちゃんかな？アイドルバンドでギターを弾いてる。」

そういうしながら、見せてきた紙面には

成長した姉の姿と助けた女性、そして先ほどぶつかった人物に似たような女性が担当楽器を持って写っていた。

「この子が氷川日菜ちゃんだよ。」

「なるほどな…」

「それでも、双子で『同じ楽器』なんてすごい偶然だね。」

「偶然…ね…：…まりな、そろそろ俺も帰るとするよ。」

「ん、それじゃあね。」

「ああ、近いうちにまた。」

そう言って席を今度こそ立ち上がり、氷川紗夜の走り去った道を歩いていくのであった。

(ぶっかった時、あの子は……泣いてた。そして、双子の存在……)

そんなことを考え、空を見上げる。

どんよりとして、今にも雨が降りそうだ。



雨空はきつと悲しみが多い……だが気分は晴れる

「もう少しで雨が降るな、これは……」

そういいながら真澄は道を歩いていた。氷川紗夜が走り去ったあとを追いかけて、C i R C I E 近くの橋に着いた。

紗夜の姿は、もうとっくに見失っていたがこちら辺を通ったのは間違いないだろう。

「恋から聞いたのは、2人は仲良しだったってこと。それが不仲になったのは中学あたりらしいな。いきなりだったから恋も驚いていたが……」

????????????????????

真澄は、ここに来る前に恋に連絡をしていた。すると……

「姉さんたち……前はすごく仲良しだったんです……ただ、中学頃から紗夜ねえが日菜ねえに怒っていたんです……僕はただ……元の仲のいい姉さんたちに戻って欲しかったんだ……でも、紗夜ねえに言葉が届かなくて……」

「その日菜って何か紗夜に何かしたのか？」

「ううん……いつも通り、同じことをしてたってことぐらい……それ以外特にはずだよ……」

「同じこと……つか……」

そう呟くと、あの世界で仲の良い双子を思い出していた。体の不自由な姉、身体能力が通常の人より、ずば抜けた妹……

その2人は互いに殺し合っていた。姉は、敵組織に騙され、身体が普通に動くようになると身体を改造され、バケモノに変わってしまった。妹がそれを食い止めるよう、ずっと1人で戦っていた。

結果的に、妹は姉を人間として、最期を送ってあげたのだ。

おにいさん? おにいさん!!

「……ああ、恋。ごめん」

「いえ、大丈夫だよ? おにいさん……」

「ん? どうした?」

「姉さんを、紗夜ねえをお願いします……もう、あんな2人を見たくないんです……!」  
「ああ、分かった。だかな、元の2人になれるかは紗夜次第になると思うぞ? 俺が話してどうなるか分からないが、それでもいいのか?」

「それでも! ……可能性があるならかけてみたいんだ……」

「……………」

今まで聞いたことのない、恋の弱音……俺はそれに答えたかった。

「了解……」

「おにいさん……紗夜ねえを……日菜ねえをお願いします……!」

「あ?????????????????  
?」

「あそこまで言われたらな……つと」

恋との連絡を思い出していると雨が降りはじめ。だが、意識が逸れたおかげか、かなり小さいが下の方から鼻を吸る音が聞こえた。

「今のって、橋の下からか？ 少しみてみるか」

そういいながら橋の下に降りてみると、探していた『氷川紗夜』をみつけた。見つけたと同時に空から雨が降りはじめ。

「君は……氷川紗夜だよな？」

「……貴方は？」

「俺は初谷真澄……恋の友達だよ。あのぶつかった時、泣いていたから追いかけたんだ」  
「ぶつかったとき……あのときはすいません……わたしも急いでまして」

「氷川日菜」

「……!?!」

「原因はそれだろ？」

「貴方もですか……」

「……」

そういうと、紗夜から生温い怒りに満ちた顔をし、こちらに牙を向けてきた。

「貴方も！ わたしと日菜を比べるんですか!!？」

「……」

「あのとき、決めたはずなのに……。日菜と話せますように……っ!？」

「あのとき……?」

「何なんですか……もう、放っておいてよ！ 一人にさせてよ……!？」

「別に、俺がここにいるのは氷川紗夜。君が泣いていたから」

「泣いていたからなんなんですか！ 泣くなっというたいんですか!？」

「誰かが言っていたんだ、『涙はここらのダム。誰にでも決壊することがある』ってな。だったら、思いっきり泣けばいい、それで涙が枯れたらまた前を向けばいい。急ぐことはない。自分のペースでゆっくり、そして確実に歩いていけばいい」

「貴方は……」

「涙を流してるところを見られたくないなら、背中を貸してやる。それで思いっきりどろしたいのか……第三者の俺に話せばいいさ……それに……」

そう言い、紗夜を見つめ直す。両目からは絶えず、涙が流れ落ちている。ただ、しっかりとこちらを見ていた。

「紗夜……君なら、まだ引き返せるところにいるんだ」

「引き……返せる……？ どういうことですか？」

「君は、まだ話し合いという選択がとれるんだ。同じ姉弟や姉妹を持つもの。だが、決定的な違いがあるんだ。俺はもう話せない。抱きしめて、両手で体温すら感じる感じがしないんだから」

「それ……って……」

「いや、姉さんが亡くなった訳じゃないんだ」

「そしたら……」

「会いに行きたい。でも、いけないんだよ。この世はね……Den y p r c h o u  
n l g i a s t o u s n e k r o s なんだよ」

「え……?」

「ここだけは隠しておきたいんだ。ごめんね? それに君に迎えがきたようだね」

そうしていると、どこからか雨の中バシャバシャと慌てながら、走り寄ってくるもの  
がいた。

その人物は、氷川紗夜と似たようで少し髪の毛の長さや色が違った人であった。多分紗夜  
の妹の日菜だろう。その手には傘が握られていた。

「おねーちゃん! やつと見つけたー! っておねーちゃん! その子誰〜!」

「ひ、日菜……」

「答えを出せないなら、待ってもらえ。だが、先延ばしにするな。延ばしたとしても……1週間。その日までに話す決めてるんだ。自然と話せるようになる。紗夜、君にはその力があるはずだ」

「……」

「さて、俺も帰って準備をしないと」

「ありがとうございます……」

そのまま真澄は、橋の下から出て、雨に濡れながら家に帰宅した。

「おねーちゃん……」

「夜、話せないかしら、日菜」

「う、うん！ だいじょーぶだよ！」

「ありがとう、日菜。それに……」

「おねーちゃん、雨に濡れてるし、はやくお家に帰ろ。おかーさんがお風呂沸かしてくれてるし」



「日菜……ごめんなさい……ごめんなさい……」

いつまでも暗い雨空だが、悪い気はしなかった。

雨の後には虹が架かるがまだ強い風が残っていた…

あのあと、暗かった雨空は無くなり、空に散りばめられた宝石のように輝く星々が見え始める。

俺はそんな空を見ながら、ココアを片手に電話をしていた。

その相手は恋であった。

「おにーさん。本当に紗夜姉さんと日菜姉さんのことありがとうございます……！」  
2  
人からも、感謝を返したいと言っていました」

「別に気にするなよ恋。俺はただ、自分の好きなようにしただけだよ」

「おにーさんならそう言うと思ってました。それでなんですけど……」

「ん？ どうした？」

「紗夜姉さんから、ライブのチケットをおにーさんに渡して欲しいって言われて、今週の土曜日なんですけど……」

「んー……土曜日か……」

俺はそう言うとも目線を壁にかけたカレンダーに向けた。

土曜日に、製作の文字が書かれたのみだった。

(製作か……まあ、少しの時間でできるからな……)

「ああ、土曜日だな。分かったよ。それで、いつ頃にどこに向かうんだ？」

「えっと……そしたら位置情報をこっちでメールしとくよ！ 着いたら一緒にライブを観れるし！」

「了解、そしたらまた後日、連絡をくれるか？ それか直接家に来て構わないが……」

「お、おにーさんの家には！ いいの!!？」

いつもよりも、数倍の声をあげる恋の声が聞こえた俺は少し耳がキーンと鳴った。

「恋、少し落ち着け。声のボリュームを下げるんだ」

「あ、ご……ごめんなさい！」

「まあ、俺の家なら何時でもきてもいいが……」

「えー！ 本当ですか!？」

俺は部屋を見渡すと少し作製したモノで溢れていた。

ピンクや白、赤など、様々な色々の布片が落ちていた。他にも粘土やらアクセサリーなどが仕上がっていた。

「そうだな……まあ、3階に入らなければいいかな。久しぶりに楽器も弾きたいからな……軽くセッションもありだな、どうだ?」

「う、うん！ 全然大丈夫だよ！ そしたら僕はギターとチケットを持っていくね!」

「ああ、だが落ち着いてくれよ？ 行動をおこすにはやる気も必要だが、恋は空回りしやすいからな。それとな……」

「も、もうそんなことはしないよ！ それじゃ明日も早いから！ おやすみなさい！ おにーさん!」

「……………うん、おやすみ……………恋」

そう言つて、恋との通信を切る。

どうやら恋の姉たち。紗夜と日菜はあのあと、昔のように仲良くなったようだった。

恋はそれが嬉しいのか、少し遅めの時間に電話をしてきたのだ。

恋の声色は何時もよりも高く、少し早口になっていた。

そして、真澄は空間魔法である収納を使い、完成されたモノを収納し、未完成のモノは放置した。

3階の1室には、未完成のモノと布の断片、ソファアが残る。

真澄はソファアに座ると収納から取り出した自らの楽器を取り出した。

取り出した楽器はギターでそのボディはアクリルに似ているが、少し違っていた。

そのギターは透明感もあるが、少し色が付いている。その色はサクラ色をしていた。もう片方の手には、カラフルな装飾をした箱、鍵もすっかり閉められていた。何時も通りの数字4文字を入力すると、中には複数のピックがはいつており、ピックは少し煤塗れになって古さを感じられた。

ピックには一文字ずつ、描かれていた。

『Y. U. A. Y』の4文字とポロポロになって見えなくなった3つのピックだった。

真澄はYと描かれたピックを持ち、弦にそえ、弾き始めようとするが、何時になっても体を動かすことは無かった……

「また……弾けそうにないか……」

自分の左手に注目するが、何の変化もない。睨めつけても何も変化もない。ただただ時間が過ぎていくだけ……

何度も何度も弾こうとしても、その腕は動くことはなかった。

ギターでの演奏を諦め、収納し別の楽器を取り出す。

次に取り出したのは、片手に収まるくらいの楽器、オカリナであった。

オカリナは白いフォルムに汚れなど知らないように輝いていた。

それを口にそえて、吹き始める。

吹いて演奏するため、歌詞はないが、その音色は、星空を彩るように、優しく包み込むような演奏であった……

気がつくくと、数時間経っていたことに気がついた。窓の外を見ると、朝日が見えはじめていた。

少し眠たい目を閉じないようにしながら、とある情報を集めていた。

後にこの集めた情報の意味を知ることになるのだろうか……

少しして、1通のメールが真澄に届いていた。恋からで、内容はそのライブのチケットについてだった。

『関係者チケットなんだけど……男性と女性の1枚ずつしかなかったんだ……』

『なるほどな……もともと日菜と恋の2人を誘う予定だったのか……』

『だけど、日菜姉さんのはRoseliaのメンバーの人から貰ったみたいで……どうしよう……』

『……よし、こつちでなんとかしよう』

『えっ？ でも……』

「大丈夫だ、任せておけて〜」

『う、うん！ おにーさんに任せるね!!』

『そしたら、入り口でチケット貰うより、こつちきてもらって受け取る方がいいか？』

『うん！ そしたらおにーさんの家に直接向かうね！ 少し早めの方がいいかな？』

『時間は任せるが、あまり早すぎても準備しきれないからな……少なくとも2時間前かなら大丈夫だよ、恋』

『了解です！ あとは……水分補給だけ忘れないでね!』

『大丈夫だって、そつちこそ忘れずにな!』

そうして、メールは終わった……

真澄はそのあと特殊なライブに行くために準備を始めるのであった……無い物と作成するものを確認するために……



# 情報と女装とライブ前!!!

恋とのメールを終わらせて、準備を終えた真澄は現在、PCの前で作業をしていた。作業といっても、情報を調べていた。

今調べているのは、青い背景に白い鳥がシンボルなアレである。これのおかげで思いがけない情報が手に入ったりするのだ。

「さてつと……他に何かないかな」

『今日Roseliaのライブ楽しみっ!』

『紫月行日、偽りに鉄槌を』

『新曲、聴けるといいなあ〜♪』

『チケット手に入らなかつた〜(汗) 誰かプレゼントして〜(汗)』

『パスパレの新曲良かったねっ! はなまる◎アンダンテ……勇氣貰えるよ……(泣)』

『すごく良かったよね……でも後半に千聖様が全然出てこなかつたよね……』

『多分アクシデントじゃない? 橋で怪我をしたとか? ボロボロだったし……』

『また? でも、最初の時よりは全然マシだよね〜』

等々……

”一部 目を引くつぶやきがあるがやはり多いのはRoselliaのライブについてだった。それほど注目されているのだろう。

”違和感のあるつぶやきについて少し気になり、その人の前のつぶやきを見ることにした。

『青月殺日、パスパレのメンバーが狙われているので、自主的守護参加求ム……』

『橙月山日、絶対に許さない……あんなことをするなんて……』

『赤月丸日、こんな方法があるなんて最高じゃないか。これなら僕は……』

など……いくつかのつぶやきがしてあった。

変化のある部分を調べるとあることに気づいたのだ……

「この文……やっぱ。おかしいよな……何故この書き方だったのか………つ!？」

とある仕掛けに気づくと、そのつぶやきを全て書き記した……そこである文章が作られていることに気づいたのだ。

「……は………つははは………なるほどな。なら次は………つとー!」

その人は本垢でつぶやきをしていたのだ。かなり前のつぶやきを見るとかなり個人的なつぶやきをしていることにも気づいた。

「……………ん。お……………さんっ！ おにーさん！」

「ん？ ああ、恋か。そろそろ時間か？」

「さつきから話かけてたのに……………それにパソコンで何を見たの？」

「今日のことについて見てたんだよ。良かったな、Rose lia結構人気で新曲が出るってファンから予想たてられてるぞ？」

「新曲？ それに関して紗夜姉さんには何も聞いてないけど……………最近話すようになったし……………あと、日菜姉さんは女物の服を着せようとするし……………」

「まあ家族と仲良くできて良かったな……………。とりあえず俺は着替えるけど、チケットに変更はないよな？」

「うん、男女一枚ずつ……………でも僕が使ってもいいよ？」

「大丈夫大丈夫……………今回は俺がこっち使うから、恋は男用チケット使いな」

そういうと、真澄は「女用のライブチケット」を蓮から受け取る。

「さて、じゃあ少し待っててな。あと今日バイク使うから玄関にあるヘルメット用意し  
といてくれるか？」

「うん、分かったよ。用意するの2つでいいの？」

「2つ用意で頼むよ、他に必要と思うなら用意しといてくれるか？」

「了解っ！」

そうして、真澄は女装するようにカツラを用意、外れないよう留め具をしつかりした。

※姿としては、黒いワンピース型で足首まで長さがある服

ワンピースと言ったが上下つながっておらず、下は半ズボンが入っている。

「お、おにーさん……それって……」

「ん、まあ変装してたからな……いなかっただけ……」

真澄はそういいながら、あちらの世界に住んでいる、城を持つ我儘ばかり言う少女を思い出していた。少女は両親はいたが、両親とも仕事で忙しく少女の世話はメイドたちがしていた。

そのせいか、我儘ばかり言うようになってしまったのだ。  
思い出語りを終わりにしよう

「おにーさん、夕飯ってどうする？ 姉さんたち、ファミレス行くらしいし……」

「んー、状況によるかな。まだ分からないし、俺の家で食事しても構わないよ」

「おにーさんの料理！ すごく美味しいものね！」

「まあ、食べたいものあったら帰りにいつてくれよ？ その時、必要なもの買いに行くか

らさ」

「うん！ あ、でももし他のみんなもきたがってたら……」

「別に構わないさ、2人で食べるのもいいが、大人数で食べた方がもつといいからね」  
「そうだね……あつ！ そろそろ時間……」

「大丈夫、話をしながらある程度できてるからね」

「ヘルメットも用意したからそろそろ行こ！」

「ああ、行こうか」

そう言い、家を出てバイクに乗り、ライブハウスに向けて出発する。

もちろん、安全運転でね

ライブハウスにつくと、少し行列ができていた。ほとんどのみんなはRoseliaを見に来たようだった。

Roselia専用のブレードを確認したり、服装の準備をしたり、煙草を吸っていたりなど……さまざまなことをする人たちが並んでいた。

俺たちは、列の後ろに並ぶと蓮からブレードを2つ渡された。

どうやら、推し専用の色を選択し振り回すのだ。蓮はもちろん紗夜のカラーである。ターコイズブルーを両手にしていた。

俺はまだ、決まってはおらず、Roseliaカラーである。ダークブルーを選択した。途中でターコイズブルーに変更できるように機能をセットをして。

列がそろそろ動き始めるのだろう。前の方から歓喜の声が聞こえてくる。それに混じり、この世界に戻った時間いた声が聞こえた気がした。それに合わせてあの世界で幾度となく感じたモノが身体中を駆けめぐる。

どうやら、アタリだったらしい。

たまたま見つけた情報の謎を解き、今日でなければ良かった。此処でなければ良かったとどれほど思っただろう。

やはり、あれは……こういうことのためだったのだろうか……

「恋、先に言っておく。もしかしたら、ファミレスで食事になるかもな。Roseliaともとれる……なんてな？」



「まあ、紗夜姉さんなら一緒にとつてもいいって言ってくれるよ」

「その時になつたら、また言うからな。何があつてもその通りに動いてくれよ？ 恋」

「でも、おにーさんの料理……食べたかつたな」

「またいつでも作つてあげるから。な？ そろそろ観客席に着くから、そんな顔いつまでもするなよ？」

「そうだね！ 紗夜姉さん自らチケットくれたんだから……楽しまないと……!!」

「姉さん本人からチケットを受け取つたのか……でも、なんで男女1枚ずつだったんだ？」

「それは命さんと一緒にいることが多かったから……多分そのせい……なのかな？」

「なるほどな……誘われたと勘違いしたのか……ならしょうがないのかな？」

「次から、人数聞いてしっかり渡せるようにするよ……」

「その確認不足でこうなつてるのか……まあ、そのおかげで……つと、席はここら辺かな」

「えつと……ここの2つみたいだね」

会場内に着き、自分たちの席を見つけだす。座席の下は空洞となつており、荷物置き

になっている。

そして、軽い荷物管理をすると会場のライトが消え始める。

スタッフからの演奏中の注意喚起、水分補給をしっかりとることを説明された。

そして、待望のライブが始まるのだ……

ライブは終わり夜がくる……闇からナニカやってくる……

そのライブは6時から始まり、終わりが8時だった。

開始からボルテージが上がっていたが、Roseliaが出てくるラスト前にいたつては最大値まで上がっていた。

「ねえ、恋……」

「なあに？ おにーさん？」

「俺たちもさ、また近いうちにライブをしよう。他のバンドも誘ってさ……」

「そうだね！ そして僕たちももっともつくと会場を盛り上げようよ！ 目標を会場全体にしてさ！」

「ああ……そうだな！」

そんなことを話しているうちに、Roseliaの1つ前のメンバーは演奏を終えて、ステージを離れていた。

そして、空席になったステージは暗転し、ゴソゴソと大小様々な5人組がステージに次の演奏のセッティングをおこなっていた。

そして、セッティングを終えたのか、暗転したステージ上から離れ、また戻ってくる。

その時には、自分たちが担当する楽器を持ち、ステージ上に立つ。

暗転していたステージに光が満ちる……

「こんにちは、Roseliaです」

その声から始まりを告げていた。

その声が耳に入り、会場全体が盛り上がりを見せる。

その声は中央にたつ、銀髪の女性から放たれていた。

その女性は周りを見渡し、バンドメンバーに目配りする。

茶髪のポニーテールの雰囲気の柔らかいベース。紫髪でツインテールでどこまでも

元気に溢れているドラム。黒髪で、全体を支える様な落ち着きを持つキーボード。そして、1つ心の殻を壊し成長を告げたギター。

メンバーたちの雰囲気を感じられたのはこのくらいだろう。

曲順としては、【BLACKSHOUT】【残酷な天使なテーゼ】そして、新曲の【Determination Symphony】

その曲は、この前の心境を表現しているのだろう。

ずっとずっと、妹の才能によって悩み……悩み悩み抜いて限界を迎えて雨空の中飛び出した……その苦悩を感じられる曲だった。いつか貴方と隣会えるように……約束を違えない様に……世界で大切な人だから……

「なんだ……笑顔、良い感じじゃないか……なあ？ 恋……」  
「うん……っ！ うんっ…………！」

そういいながら恋は涙をポロポロ流しながら聞いて、ブレードを振っていた。

恋の心に繋いでいた鎖もまた、砕けたようだった。

Roseliaの曲は全て終え、会場の熱が高まりきって、完璧に燃焼していた。メンバーたちは退出するが、紗夜は少し目線をコチラともう一方に向け、立ち去る。

「恋、そろそろ泣き止みなって……観客だった人たちが見てるよ?」

「だつてえ……だつてえ」……!!」

「姉さんの関係ですつと悩んでたのは知ってたけど、落ち着きなさい!」  
「あれ? どうしたのかな?」

そんなことをしていると恋とは別方向か、声がかげられる。

その声はRoseliaのベースだろう。

「いえ、貴方たちの演奏を聞いて、号泣しているだけですよ？ Roseliaのベースさん？」

「あ、あはは〜そんなに感動してくれるなんて、なんだか嬉しいなっ！ あ、アタシ……」

「知ってますよ？ 今井リサさん？」

「なんだ〜知ってたんじゃない〜」

「流石に聞きに行くのならメンバーを知る必要あるでしょう。私は、初谷真澄です」

「初谷真澄……最近聞いたような……？」

「きつと、メンバーから聞いたんでしょう」

「そういえば、紗夜が言ってたような……あ！ 真澄さん、演奏どうでした？」

「ええ、1人1人……良い音をしていました。良かったと思います。すごく楽しめましたよ」

「そうですよね……」

「ありがと〜あつ、ハンカチいる？」

「いえ、大丈夫ですよ。お気になさらず」

「そう？ でもずっと泣いてると……」

「ハンカチ3枚目ですから、使い続けて」

「それ泣きすぎじゃないっ!？」

「いつものことですよ、この子感動するとまるで、身体中の水分全て流し切ってしまうんじゃないかってぐらい、泣いてしまいますから」

「え……えつと……それ大丈夫なの?」

「いつものことですよ」

「あ、あはは……」

「それに、今日来て良かったと思います。この子も成長しました。貴方たちのおかげで……」

「この子って……紗夜と日菜の妹かな?」

「恋は男性です。可愛いけどね」

「へえー? こんなに可愛い子がね〜」

「見た目で全部騙されちゃいけないですよ? そのせいで先入観が邪魔して大切なことにも大事な事にも気づかないですからね」

「なるほどね〜」

「おにーさん、そろそろ行きましょう?」

「ああ、そうだね……つと……」



話に夢中になっていたためか、Roseliaのメンバーと日菜たちが後ろに立っていた。

紗夜は周りを見渡していたが、少ししたため息を吐く。

銀髪の女性は、何か考え事をしていた。

紫髪の小さな子は黒髪の女性と話している。

日菜は、一緒に来ていたのであろう、千聖と彩と話をしていた。

「リサさん、そろそろメンバーの人たちと予定があるのでは？ だから待ってるのでは？」

「あっ！ そうそうこの後ライブの反省会なんだ〜キミたちも来る？」

「そうですね……恋。どうしますか？」

「ほ、僕は……」

そんな話をしていると後ろから彩たちと誰かの話し声が聞こえてきた。

「えっと、パスパレの丸山さんですよ。あつ！ 白鷺さんと氷川さんも！」

「え？ えっと……」

「彩ちゃん……すみません。今プライベートなので申し訳ないのですが……」

「そ、そんなことより！ はやく逃げてください！ 丸山さんを探してる怖い男の人たちがいるんですよ！」

「えっ?！」

そうしていると、彩たちに話しかけてきた弱々しい男性とは別に近づく男性たちその容姿は、誰から見ても普通じゃなさそうな怖い姿であった。

「すみません、丸山彩さんですね？」

「は……ふぁい!?!」

「すまないがこちらに来てもらおうか？」

その声を聞いた真澄は恋に話しかける

「そういえば恋……このあとお姉さんたちに話しがあつたのでは？」

「え？ ……!? そ、そうだね。そしたら一緒にいつてもいいですか？ リサさん！」

「う、うん。大丈夫だよ」

「そうしたら早めにいきましよう。千聖さんや、日菜さん。彩……さんも一緒に連れて」  
「そうですね！」

そういうと、真澄と恋は彩たちのところに向かう。

まだ、男性たちと話しをしているところに割り込む。

「すいませんが、これからRoseliaと私達、千聖さんたちと話し合いなのでそれでは」

そうして、恋に日菜を任せて自分は千聖と彩と手を繋ぐ。

そして、この場を離れようとRoseliaと合流しようとするが、男性たちが止めにはいる。

「おっと、そういうわけにはいかないぜ？ その子はこっちに來てもらわないといけないんでね」

「そういうことですか……なら！」

「恋！ 合流先は分かっているね？」

「う、うん！ 大丈夫だよ！」

「それじゃ!!」

「……………」

「……………」

「……………待てえ!! おいコラアア!!!」

その言葉を発すると同時に恋と真澄は別方向に走り出す。

弱々しい男性も一緒に走り出し、真澄たちについていく。

怖い面相をした人たちは唾然としていたが、少しして状況を理解したのか、走り去る真澄たちを追いかける。

「さて、どうするかな……………」

「ど、ど、どうしよ! 千聖ちゃん!」

「落ち着いて彩ちゃん! とりあえず警察に……………」

「交番は反対側だよ、だったら逃げ回って撒いたほうがまだ安全だよ。とりあえずこの手、離さずにね? 2人とも」

「わ、分かりました!」

「でも、これ長くは続かないわよ?」

「たしかにね。とりあえず千聖さん。貴方にこの手紙を渡しとくね？ あとで確認してちょうだい」

「ええ、でも貴方なんで……」

「お静かに、その訳も手紙に書いてあります」

「えつと……そういえば貴方は……？」

「彩ちゃん、この人はね……」

「真澄と、今は呼んでください」

「えつと……真澄ちゃん！」

「呼び捨てでお願いします。またはさん付けで」

真澄ちゃんって言われた瞬間千聖は顔を逸らし、笑いを堪えていた。

その事に気付くと即座に訂正を求め真澄

そんなことをしているうちにほんの少し片腕に力が加わる。その腕は千聖と繋いでいたのだ。

「ご、ごめんなさい。あまり運動を好まなくて……」  
「わ、わたしも……」

そう、走り続けていたためかスタミナが切れ始めていた。

やはり、バンドをしているためいつもよりは体力は持つが、走り続けるとすぐに疲れしてしまうのだろう。

「いえ、このことは想定内ですよ。あと少し持つことは可能ですか?」

「ほんの少しなら……だ、大丈夫……ぶよ……」

本当に長くは持たないだろう。だったら、もともとの作戦を変更すればいいのだ。この時、認識阻害する魔法「インビジブルカーテン」を使用する。

この魔法は触れている相手を意識外に置くことにより、認識しにくくなる魔法である。そして、小声で千聖ち話しかける。

「なら千聖さん、このあとこれの指示に従ってください。いいですね？」

「で、でもこの後って……」

「大丈夫、安心して……キミたちは見つからない。ゆっくりでいい。呼吸を落ち着かせて時間通りにしてくれれば」

「……………分かったわ」

「千聖さん、少し手を離すので彩の手を握って……」

「……………」コクリ

そして、千聖と繋がれた右手を離し手紙を渡す、左手で繋がれた彩を千聖に近づける。千聖は空いている彩の左手を掴み取る。

そのことを確認すると、ポケットからナニカが包まれたものを取り出し地面に叩きつける。ポフンツと音がするとあたりに白い煙が充満する。



「ブラインドスモーク」ボソボソツ

煙玉だけでなく、魔法も使い煙を作り上げる。近くにいた、千聖や彩の姿はもう目視できない。それを確認するともう一つの魔法を唱える。

「……………」ボソボソツ

そして、弱々しい男性の居場所を見た自分は彩と手を離し、男性の手を取り走り出す。

「こちらです！ ついてきてください！」

「えっ！ あ、彩ちゃん!？」

千聖にとつて聞き覚えがあり、彩にとつては毎日……いや毎回聞いている声が耳に入ってくる。その事に困惑する。何故なら……

少し煙も晴れて、周りを確認できるようになる。その先には、「もう一人の丸山彩」と手を繋ぎ、走り去っていく弱々しい男性の姿とそれを追いかける男性たち

「な、なんで……？ 彩ちゃんはここに……」

「わたしが、もう一人……？」

「そうよね？ てことは、変装？ でもこんなにはやくできるのかしら？」

訳もわからず、つい手を握りしめると手の中からクシャツと音になる。

手紙の存在を思い出すと、手紙を開き読み出す。

「彩ちゃん、とりあえずこの手紙の指示に従いましょう」

「その手紙って、真澄さんからのだよね？」

「ええ。何故だか分からないけど、私たちは今、安全に行動ができるようになったわ」

「う、うん。そうだね！」

そして、手紙の内容を見始めようとする二人。すると鍵が一つ音を立てて落ちる。それを拾い、内容を確認すると二つの指示が書かれているだけであった。

『1つ、鍵は彩さんがしつかり持ち、二人ともRoseliaと恋たちとファミレスで合流すること。きつと使う 事になるでしょう』

2つ、千聖さん、あなたは彩さんを送ってください』

「……………行きましょう彩ちゃん」

「で、でも……」

「真澄さんにもしつかり作戦もあるみたいだし、恋君……だったかしら？ その子も信じていたのよ？ それに日菜ちゃんも心配だし……」

「そう……だね………いこう！」

二人は無事、ファミレスに着くことができ、彩たちはRoseliaと恋たちと食事をとることになる。

だが、途中匿名で千聖にメールが届く。それはGPS情報と一言。『1人でこの場所へ』とだけ……

先に食事を終えた千聖はみんなと別れ、指定されていた場所へ向かう。

千聖が目的地である廃工場に着く

中に入ると中央周りに気絶した怖い男性たちとその中央に立つ二人の男性。

二つは重なるようなくらい近くに立っているが、片方は驚き、片方は笑みを浮かべる。その足下には血溜まりができていた。

闇から生まれたのは病みだけではない

千聖が目的地である廃工場に着く。

中に入ると中央周りに気絶した怖い男性たちとその中央に立つ二人の男性。

二つは重なるようなくらい近くに立っているが、片方は驚き、片方は笑みを浮かべる。

その足下には血溜まりができていた。

何故こんな状況になったのか……

少し時間を巻き戻そう……

そして、弱々しい男性の居場所を見た真澄は彩と手を離し、男性の手を取り走り出す。

「こちらです！ ついてきてください！」

「えっ！ あ、彩ちゃん!？」

千聖にとって聞き覚えがあり、彩にとっては毎日……いや毎回聞いている声が耳に入ってくる。その事に困惑する。何故なら……

少し煙も晴れて、周りを確認できるようになる。その先には、「もう一人の丸山彩」と手を繋ぎ、走り去っていく弱々しい男性の姿とそれを追いかける男性たちだった。

そのまま走り去る真澄の耳に聞こえてくるのは、千聖と彩の疑惑を感じさせる声だった。

「な、なんで……？ 彩ちゃんはここに……」

「わたしが、もう一人……？」



「そうよね？ てことは、変装？ でもこんなにはやくできるのかしらっ？」

その声を聞き流すと男性と繋いでいる手をしつかりと繋ぎ直し、もう片手に持つスマホで『とあることをしながら』道を右に左にとあちこちに進み始める。

途中、路地裏を通ったり塀を乗り越えたり等、数多の出来事をこなす。

そんなことをしていると目的地でもあるある廃工場に辿り着く。

中に入ると埃まみれになった内装、空になったコンテナが複数個転がっていた。

「はあ、はあ……あ、彩ちゃん。とりあえずこっちに……っつてあれ？」

何時の間にか繋がれていた手は離されて廃工場の真ん中に1人、ぽつんと立ちすくむ

でいる男性

「さて、キミに1つ聞きたいことがあるんだ……」  
「!？」

男性は振り返ると空のコンテナの上に足を組みながら座っている彩の姿があった。スカートを履きながら足を組んでいるからか中の布が見えそうになっているが、男性はその布よりもその手に持つているモノに目を奪われていた。

「コレ……どうするつもりだったんだろうね？」

「そ、それから手を離すんだ！ 彩ちゃん！」

「ん？ どうして離さないといけないんだ？」

「だ………だっ………」

その手に持っているモノは注射器に白い粉が内蔵されていた。  
中身に関しては……後ほど分かるだろう。

「まあ、今はこの話はいいだろうね……とりあえずその前に……」

そう言うと、コンテナから飛び降りるとポケットから複数枚の紙を取り出すとばら撒く。

それと同時にたくさんの人が飛び込んでくる。

「おいっ！ コラアああ!! やつと追いついたぞおおお!!」

「お？ なんだこの紙は！ ってツウオータの投稿？」

そう、紙の内容はSNSに投稿された文がコピペされていた。

それはいつの日か情報を探している時に見つけていて、違和感の覚えていたアレである。

「あ、皆さんもちょうどよかった。実はこの人が投稿者ですよ、その文のね」

「そ、その文がなんだって言うんだよ！ 別になんもないだろ!!」

「でもよ、これ日付おかしいよな？」

「たしかに、でもなんだらうね？ どっかで見たことあるような……」

「そう、日付が問題だったんだ。とりあえずコレはね解き方があったんだ。まあそれは置いて、キミに言いたいことがあったんだ」

そう言い、男性に近づくと目を見ながら声をかける。

「いつまで嘘をついてるつもりだ？」

「なっ?!？」

「嘘?!？」

そして、相手から離れると水道管と繋がっているホースを手に取ると蛇口を捻った。ホースに水が通っていく。

「さて、謎を解明していこうか？」

ホースの中の水をばら撒く。周りにもその水が降りかかる。ある程度、水を振りかけるとある現象が現れる。

「ちよ！ あ、彩ちゃん！ 水かかってるって！」

「新しく新調した服があ！」

周りの水害は気にしないようにしよう……

「さて、これが答えだよ。ツウオータネームの『白カラス』さん？」

「……なんで気づくんだよお!!」

「簡単すぎたんだよ、謎解きってほどではないけどね？」

「どういうことだ……？」

「さて、なんで水を撒いたと思うかな？」

「知らん！」

「……………」

「……………」

「え？　ここまで静かになる？」

「まあ、いいか。とりあえず水を撒いたのはあるモノを作るためだよ」

『虹』であつた。そう、水を撒いていたのはあるモノを作り上げるためだつたのだ。そのあるモノとは

「コレが答えだよ。そして……」

いくつかばら撒いた紙を取り、話しかける。

「さて、虹とこの紙についての繋がりはね、月日を見てほしいんだ。そうするとね、白カラスが嘘をついているのがわかつたんだ。その順番に並べ変えるとき……」

「……めろお……」

「そう、答えは……」

「やめえろおおお!!」

「丸山彩毒殺決行……七色で描かれた殺人計画だよ」

「何だと? おいコラテメエ、そりや本当か?」

「……………」

「テメエに聞いてるんだよ、シカトぶっ込んでんじゃねえぞ!!」

「……………ツチ。あーあ、お前もツマラナイことすんだな? ツマラナイツマラナイ

……………」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

そんなことを話していると、周りの音を遮るように綺麗な音が鳴り始めた。

男たちは、音の音源を探そうと白カラスから目を離す。そして囲うようにしていた陣から段々と広がっていく……

そう、足もとが水溜りの上に、白カラスが乗った……その瞬間——

そこまでが男たちの記憶である……



白カラスはパチツと音がし、目の前が点滅する。あまりの眩しさに目を腕で遮り光を遮断する。

それと同時に、複数の唸り声が聞こえ、遮っていた腕を離すと周りの人たちは気絶していた。

少し焦げくさい匂いが漂う中、驚いていると、すぐ後ろから声をかけられる。

「白カラス」

「!？」

声が聞こえ、振り返ろうとするが腰に何か尖ったナニカを突き刺されていた。

少し力を込めれば、その肉を割き、熱を帯びるの感じでした。

白カラスは何もできなく、話を聞くことしか今はできない。

「キミには感謝をしているんだ、僕は」

「な、何を言ってるんだ？」

「キミがいなければ、僕は感じられなかったよ。それが少しだけでもね。ありがとう、白カラス」

「おい！ だったらその腰に突きつけているナイフを離せっ！」

「別に？ 構わないよ？ こっちみても、だつてさ……」

構わないと聞いた白カラスは、すぐに振り向き突きつけていたものを見ると、杖のようで、先端がガラス細工でできたものだった。しかし、先端と杖は何かコードで繋がれており、何故か先端だけがこちらの腰に当たっていた。

「さて、そろそろ終わりにしようか……」

「終わり……だと？」

「最後に聞きたいことがねあるんだよ。君さ……この薬どうやって手に入れたのかな？」

「し、知らないっ！ 俺は貰っただけで！」

「貰った……ね？ どんな人だったのかな？」

「アイツは、SNSで話しかけてきたんだ……だが！ それ以上は知らないんだっ！」

「その連絡の内容は残っているかい？」

「お、俺のスマホに……なあ？ 助けてくれよ……」

「……」

「ああ……」

白カラスから取り出されたスマホを貰い画面を見ると、『どこかで見たことのある名前』が映っていた。

「なあ……もういいだろ？」

「……ああ、もういいよ」

「それじゃあ……」

後ろから突きつけていたものを放し、白カラスに背中を向け、帰ろうとした瞬間……背中に何かが刺さり、そのところが熱を持ちはじめた。その何かはすぐに抜かれた。後ろを見ると、白カラスの手に血塗られた小さな折りたたみナイフを持っていた。

そのことに気がつくと、今度は正面からナイフを突き刺してきた。

刺された箇所から熱を帯びはじめる。

まだ刺そうとしたのか、その手を引こうとする手を片手で掴み、刺された状態のまま話をはじめ。

「白カラス………」ボソボソ

「……っ!?!」

耳元で何かを囁き、離れようとしたら入り口辺りから、何かを落とした音が聞こえる。

少し目線を向けると、千聖が入り口に立っており、唾然としている。その千聖の足元には手提げ鞆が落ちていた。

## 刺し傷と拒否とメイド?

薄暗い廃工場の入り口で千聖は先程の男性に刺される真澄を見てしまう。

赤い雫は汚れた床にポタツポタツ……と滴り落ちる。

「ま、真澄……さん?」

「少し離れた場所なのによく分かったね? 千聖さん。まあ、それはいいよ」

そう言うと、真澄は刺されたナイフを抜こうと触れ、軽く静電気がバチバチと帯びる。するとナイフを持っていた白カラスは気絶したように崩れ落ちる。

背中に刺さるナイフを抜き取ると内ポケットに仕舞う。

痛々しくも刺された痕から血が止めどなく零れ落ちる。

千聖に軽く近づくと、千聖は手提げカバンに入っているハンカチを持ち、急いで近づいてくる。

「ちよ、ちよつと！ 動かないで！ 傷が酷くなるわよ！」

「大丈夫だよ、まだ普通に動けるし、深く刺された訳でもないから……ハンカチが汚れるから止めといってくれないかな？」

「汚れるからって、血がまだ出てきてるじゃない！ ひとまず止血しとかないと……！」

千聖はカバンから取り出した清潔な白いハンカチを取り出し、真澄の背中にてきた刺し傷に押し当てる。

汚れを知らぬ白いハンカチは、血によってだんだんと赤く赤く染まっていく。

やがて白い部分が全て赤く染まり変わる。

千聖はハンカチの他に治療できるものはないか探していると近くでビリビリと何かを破く音が聞こえる。

その音は真澄が片袖を引き千切り、刺されたナイフで片袖を包帯に変化させていた。

「使ったものは仕方ない、とりあえず傷痕にそのままハンカチを当ててもらえるかな？

包帯を巻くからさ」

「貴方……痛く無いの？　すごく痛いはずなのに……」

「痛くない訳ではない……かな？　でもさ、もつともつと痛いことはとつくに体験して  
るからさ。それと比べたら全然耐えられるよ。それに……」

「ひとまず、救急車ね。それとその包帯で巻くのをやめておきなさい。清潔な布ではな  
いもの……」

そうして、千聖はカバンからスマホを取り出そうとする腕を止める。

その手は、真澄から出ていた。

「ちよつと、これじゃ「すまないが、救急車を呼んでも意味はない」あ……え？」

「応急処置はできたから、あとは家で大人しくするよ」

「待ちなさい、その傷で治療しないと……」

「ありがとう、助かったよ千聖」



そう言つて、立ち上がり、去ろうとすると入り口からコツコツと足音が聞こえてくる。真澄は千聖を背中に隠し、入り口を確認する。

入り口に影ができ、その人物は入ってくる。

その姿は、雪のように白く輝き、腰あたりまで伸びる髪。すらつとし、長い足。そこら辺に滴っている血の海より濃い赤い瞳。

両手に持っている小型ナイフ。

そして、埃一つついてないメイド服。

「見つけましたよ？」

「貴方は……誰？」

「はあ……シアンか。お前はやつぱり来たのか」

「私の行くべき場所は何時何処でも貴方の後ろです。例え何処に行こうと着いて行きます。私の後にはメラルに任せてあります。あの子ならできますからね」

「来ちゃったものは仕方ないか……とりあえず千聖を送り届けないとな」

「え……………ええ」

そのメイドはシアンという名を持っていた。真澄とのかかわりがあるらしい。シアンは、そのまま近づき真澄の前に立つ。

千聖も警戒を解き、シアンと言われた少女を見ていた。

両手に持っていたナイフは何時の間にか消えていて、素手であった。

千聖に気がつくくと、顔を確認するために顔を近づけていた。

「……………」ジー

「えっと……………何か付いてるかしら?」

「いえ、貴方が話されていた人物かと思いましたが。髪の色や身長、瞳の色等々違っていましたので」

「そうなのね」

「とりあえず、此処を出るとしないか? 千聖も帰らないと駄目だろ?」

「そうね、でも病院には必ず行ってちょうだい」

「大丈夫だよ」

「行きなさい」

「大丈夫です。私がつかりと連れて行きますので。千聖様……あつ、紹介が遅れました。シアンと申します」

「シアンさんね、私は白鷺千聖です」

「それで、千聖。どこまで送っていったらいい？ 学校までか？ それとも最寄りの公園とかかな？」

「そうね、このまま病院と言いたいけど、この時間だもの。応急処置したとはいえ、救急で呼び出したとしても歩けてるもの。ひとまず公園でいいかしら？」

「シアンもそれでいいか？」

「何時迄も私の答えは決まっていますよ？ 例え地獄でも、私は着いていきます」

「ありがとな……。さて、行こうか」

廃工場から歩き、公園に向かう。

会話はシアンと千聖のみであった。

どんなものが好きなのかだったり、普段何をしているのかだったりと会話が広がって

いた。

その際、真澄の方に電話が入る。その連絡は恋からであった。

「はい、どうした？ 恋？」

「おにーさんっ！ 大丈夫でしたか!？」

「ちよつと落ち着けて」

「……少し声が痛みに耐えてる感じ」ボソボソ

「ん？ 恋？ 聞こえてるか？」

「おにーさん、怪我でもした？ 何時もよりも声に力がないよ？」

「ん？」

「おにーさん、怪我したでしょ？」

「応急処置も終わってるから大丈夫だよ」

「道具一式持って、家に行きますので、玄関で合流しましょう」プツツ

「おい、恋？ 恋？」ツーツー

「恋ちゃんからの電話ね？」

「まあ、そうだね。玄関で合流らしいからな……とりあえず千聖を公園まで……」  
「それは私が着いて行きましょう」

「シアン？」

「大丈夫です。コウエンにまで千聖様と一緒にいきます」

「ええ、その方がいいわ。私はシアンさんとまだ話したいし。真澄さんは早く家で休んだ方がいいわ」

「千聖さんの言う通りです。私も真澄様に早く休んでいただきたいので……」

「シアン、俺の家分かるのか？」

「大丈夫です。それくらいなら分かりますよ」

「りょーかい、なら千聖のことはシアンに任せるよ。でも危ない時は呼んでくれよ？」  
「了承しました。では、行きましょう。千聖様」

そうして、真澄1人と千聖とシアンの2人に分かれた。

そして、自宅に行くと玄関の前に恋と命の2人が立っていた。

「おかえり、真澄。それと……パスパレの白鷺さんと……メイドさん?」

「おかえりなさい、おにーさん」

「命と恋? どうした、そこに立って……?」

「おにーさんが心配だったの、あの後食事を終えて、分かれたんですがその時命さんと会いまして……」

「あなたが一人で困になったって聞いたから心配したのよ。まあ、心配してたのは私たち以外にもいたみたいね」

「恋にも悪いことしたな、いきなりでごめん……」

「いえいえ、大丈夫ですよおにーさん! 今度はしっかり言ってくれましたから。でも、何も言わずにいなくなるのはやめてくださいね?」

「その今度があったらね?」

「さて、それじゃ応急処置はしてあるなら本格的に治療するわよ。真澄、家に道具はあるかしら?」

「一通りの物は用意してあるよ。消毒液、包帯、ガーゼ等々。今回は自分だったが、ほかのメンバーの治療のために準備はしてある」

「なら、さっさと治療しましょ。貴方はどうするのかしら、白鷺さん。このまま帰ってもいいわ」

「そうね、このまま帰宅させてもらうわ。明日は予定があるので、申し訳ないけど……」  
「ひとまず、今日はもう何も無いと思う。でも、気をつけて帰ってくれな？」  
「ええ……」

そのまま千聖は帰宅していく。  
猩は家を開けると、恋と命が入ってくる。

「それじゃ、お邪魔するわね」

「お邪魔します。おにーさん！ それで救急箱はどこに？」

「どうぞ。恋、セツトは正面の部屋の棚の中にあるよ。命、とりあえず正面の部屋の椅子  
まででいいか？」

命は猩を支えゆつくり歩いていく。恋は治療するための道具がある棚の中を探しに  
いく。

「えっと、傷薬に包帯、テーピングのロールにガーゼ！ 一通り揃いました！」  
「恋、ありがとね。さて、治療を始める前に聞きたいことがあるわ、猩……」

椅子に座る猩の目の前には、救急箱を持つ恋と鋭い目線を向ける命が猩を見つめていた。



## 治療とメイドと行方不明期間

猩兼真澄の自宅にて……

「えっと、傷薬に包帯、テーピングのロールにガーゼ！ 一通り揃いました！」

「恋、ありがとね。さて、治療を始める前に聞きたいことがあるわ、猩……」

「恋、言いたいことは分かっている。先にこつちを終わらせた後に話すよ」

「……そうね。先に治療が先ね。ごめんなさい。でも、しっかりと答えなさい。痛くするわよ」

「隠すつもりは無いよ、それじゃ頼む」

「そしたら、恋。鋏はあるかしら？ 無いなら何か切れるものを……」

「こちら鋏とカッター、両方とも準備できてます！」

「そう、鋏を貸してちょうだい」

「はい！ 分かりました。おにーさん、それじゃ、シャツを切りますよ？」

「……………」スースー

「やっぱり、治療のために睡眠をとったのね。恋、このあと血を見ることになるけど大丈夫？」

「少し怖いですが、ですが、このまま無視なんてしたくないです。おにーさんの治療、急ぎましよう！ 命さん」

「そうね、それじゃ包帯を巻きやすくすると、状態確認しやすい様に家具を動かすわよ。恋、貴方もこの配置に頼めるかしら？」

そう言つて、恋にメモを渡した。

そのうちに、命は医療服を着る。

机の上に猩を乗せるために、物をどかし始める。

机の上が片付き、机の上に猩をうつ伏せに寝かせる。

命は鋏を持ち、シャツを縦に切り裂く。

シャツを切り裂き、開くと……

恋は驚愕し命は確信していたのか、あまり驚かない。

「やっぱりね、かなり身体付きが良くなっていたから気になっていただけ結構鍛えていたみたいね」

「おにーさん……いったい何処で……しかも傷がいつぱい……」

「それほど、濃厚な行方不明期間だったはずよ。この傷なんて、かなり鋭い刃物で裂かれているし、この腕だって……」

そう言って、シャツを完全に脱がした猩の背中には、先ほど刺された傷の他にも沢山の傷があった。

命に言われた腕は、完全に切断された痕跡がある。今は義手がある。片腕はまだ本物の猩の腕であった。

「さて、とりあえず今回はこの傷でしょう。恋、アルコールはあるかしら？」

「……」

「恋、今は物思いにふける必要はないわ。私たちが今すべきことをしましょう」

「……はい」

そうして、治療を始める。

命は経験があるのか、テキパキと処置を始める。

恋も命のサポートを始める。

2人は何度も経験したことがあるのか、無駄のない動きで治療を続ける。

---

↳ 数十分後↳

「さて、治療も終わったわね」

「そうですね……命さん」

「恋、こつちに来なさい」

「え？ は、はい……」

命は恋を呼ぶ。近くに寄るとすぐに恋を抱きしめる。

「み、命さんっ!?! どうしたんですか!?!」

「恋、聞きなさい。今はまだ混乱してるかもしれないわ。でもね、この傷の付きかたはね、誰かを守ってできたものと思える。でないと、猩が背中を見せて切られるなんてことは、ほぼないと思っ正しいわ」

「……」

「その、行動を肯定しなさいとは言わないわ。でも否定するのは駄目よ? これを否定すると言うことわね」

「……猩さんの行動を否定することになる……ですよね?」

「ええ、そうよ。かと言って肯定しなさいなんて言わない。私だって許せないわ。こんなに傷ついて」

「……分かります」

「だから、私は決めたわ。猩の傷つける全てのモノから守るって……。でもね」

「……」

「私でも気づけない穴がきつとある。それで傷ついてしまうかもしれない。だからね、恋……貴方の力も貸してちょうだい？」

「私の……力……ですか？」

「1人の力だと、ほんのちっちゃな力にしかないわ。でも、2人ならどうかしら？」

「3人になったときは？」

「少しずつでも強大な力になります……」

「そう、その力を手に入れるために貴方の力が必要な。だからね」

そう言って命は恋に手を差し、頭部を下げる。

「弱い私と一緒に彼の力になってくれないかしら？　お願い……恋」

「私、命さんの話を聞いて決めました。命さんよりも小さな力です。ですが、小さな力でも役に立つなら私は喜んで力を貸します。ですので、一緒におにーさんを支え合いましょう！　命さんっ！」

「ええ、もうこれ以上彼を傷ついてほしくないからね」

「それに関しては私も同感ですよ？ 弦巻命さん。氷川恋さん」

「!?!」

振り向くと天井から逆さになっているシアンがいた。

2人は驚きを隠せずにいたが、シアンは表情を変えず、天井からシタツと降りる。

「はじめまして、狸様のメイド兼情報担当のシアンです。お二人方……あつ、こちら紅茶になります。落ち着きますよ？」

元々配膳するためなのか、カートの上に紅茶やらお茶菓子が用意されており、カップを2人と自分の前のテーブルに置き紅茶をいれるのだった。

「お二人方、紅茶はミルクや砂糖を入れますか？ それともストレートですか？」

「……私はストレートでお願い」

「ミルクのみでいいでしょうか？」

「ストレートとミルクのみですね。こちらになります。お茶菓子も一緒に召し上がりください」

恋と命は紅茶やお茶菓子に手を出す。それにより少し興奮状態だったところを鎮静効果により、通常に戻る。

「紅茶をありがとうございます。シアンさん……でしたね」

「ええ、好きにお呼びください」

「自己紹介が遅れてたわね。私は弦巻命。猩とは少し古い仲よ」

「氷川恋です。シアンさん、いきなりですみません。おにーさんと何時お会いしたのですか？」

「そうですね……詳しくは私も説明できませんが少なくともお教えできるのは、『行方不



『明期間』の間であることは確実です。あの方は私を含め数人、命の危機からお救いいただけました。そのおかげで私は今もなお、活動を続けられます。私の命はあの人に差し上げています。例えどんなことをされても、痛みに表情を変えても拒むことはないです」

「そこまでのことがあったのね。それで、私たちに話をしようとしたのはどうしてかしら？」 紅茶も自分の分を用意して……」

「貴方達とお話しをしたいと思いますと思っておりました。猩様がずっと話されていた、『親友』の貴方達と……」

「そう……」

「親友……おにーさん……」

紅茶を飲みながら話を続けていた。

そこで色々な話をしていく。

行方不明期間の時、何処にいたのかは明かすことはしなかったが、どういう日々を過ごしていたのか。

猩がいない間何があったのかの情報を互いに共有しあっていた。

数十分もの間話していると置き時計がポーンポーンと鳴り響く。

夜も遅くなってしまっていた。

その音が響くと同時に恋のポケットから音楽が鳴り始める。

プルルルル……プルルルル……

「あつ、ごめんなさい。私の携帯です。少し離れますね」

「この時間だし、多分お姉さんたちね。さつきも会っていたみたいだし……そろそろお開きにしましょう」

「命様、今日はお泊まりになってはいかがでしょう。恋様もご一緒に……。その方が皆様もお喜びになるでしょうし」

「そうね……恋を送り届けるにしても遅くなるわね、それなら一日お世話になるわね。シアンさん」

「了解しました。湯汲みの準備はすでに整っております。服に關してですか、既に用意

しておりますので、こちらをご使用ください」

「元々、泊ませる予定だったのかしら？」

「いえ、何時いかなる時も対応しております」

「命さん、シアンさんすいません。そろそろ私帰りますね」

「恋、ちようどよかったわ。今日はここで泊まりしましょう。シアンさんからの許可は得ているわ」

「えっ？ いいんですか？」

「その方が狸様もお喜びになると思いますし、治療もなされてお疲れでしょう？ 湯汲みもありますので、こちらでお休みください」

「そしたら、紗夜ねえに連絡入れときます！」

その様な会話を始め、お泊まりをするのだった……

## 起床と朝食と一波乱!!?

太陽が見え始める少し前に猩は目を覚ました。

包帯の巻かれた身体は少し動きづらく、蒸しており、汗が染み込んでいた。

「ふわあ……。ここ……は俺ん家か。今は……まだ朝になる前か……」

「おはようございます。シヨウ様。怪我の様子はどうでしょうか？」

「さあね？ とりあえず汗かいたみたいだから、包帯を巻き直してもらってもいいかな？」

「ええ、構いませんよ。新しい包帯も用意してますので」

「ありがとうございます。それとシアン……何故ここにいるんだ？」

「ふふつ。私がいる場所は最初からシヨウ様のところですよ。アチラのごときは他の者に託しましたので」

「そうか……そっか……ありがとうな。シアン」

「いいえ、それが私がシヨウ様にできる恩返しですから。それでは巻き直しますね」

そう言うのと、身体に巻かれた包帯は一瞬で切り裂かれ、瞬きした時には新しい包帯が巻かれ直されていた。

ついでに、身体についた汗はタオルで拭かれていた。

「相変わらず早いな。ありがとう」

「シヨウ様は怪我をよくしましたから、治療に関しては一番に学びましたからね。ですが、今回の私がやったわけではないですよ？」

「ん？ そしたら一体誰が？」

「シヨウ様の大切なご友人たちですよ。恋様と命様のお二人方です」

「恋と命が？ 一体何時……俺が気絶したあと……だよな？」

「ええ、こちらの自宅に着くとお二人方は玄関の前でお会いしました。恋様が心配してたみたいでして……救急箱を持っていましたよ？」

「救急箱……? あつ、そういうや直前に連絡とつてたな。それで2人は?」

「時間も時間でしたので、お泊まりいただきました。部屋の方は客室がありましたので、そちらにご案内いたしました」

「了解。そしたら……もう一眠りするから、2人が起きたら起こしてもらえるか?」

「了解いたしました。食事の方はいかがなさいますか? 軽めにすることも可能です。

その怪我もありますので余り重たいのはやめとくべきでしょうし」

「そっか、そしたらいつものようにしといてもらえるか? 2人には普通のを頼む。あ、

あとこれも一緒に頼む」

「はい、ではゆっくりお休みくださいませ……」

「ああ、それじゃあ頼むよ。シアン」

そう言つて瞼を閉じ、暗闇に身を任せた。

「……眠ってくださいましたね。今の狸様はまるで蠟燭のようですからね……。つと、それと何を頼まれたのでしょうかね？」

そう言つて開いたメモには「カメラ」の一言のみ書かれていた。

「カメラ……ですか？ 一先ず用意しておきましょうか。どこから探しましょうか……。とりあえず近場から……つて」

そう言い、近くにあるダンスを下から調べてみるとカメラがケースと一緒に入っていた。一緒に使用済みのフィルムも使用前のも幾つか入っていた。

「こんなに近くにあるのに……。少しこのフィルムでも見て待っていましたよかね。あとは顔を見ながら……」

ずっとフィルムに向けていた顔を寝ている猩に向けてみると、ぐっすり眠っているがその閉じた瞳から涙が出ていた。

それを見るとハンカチを取り出し、出てきた涙を拭い、そつと部屋から出て行った。その後も閉じた瞳から涙は流れ続けた。

別の部屋に行ったシアンだったが、フィルムをキラキラした目でずっと見ていたらしい。

恋と命は起きて部屋に入った時には、フィルムは片付いており、調理台の前で料理をしていた。

「おはようございます。恋様、命様」



「シアンさん……でしたね。おはようございます」

「今、朝食を作っておりますので、猩様を起こしてきてもらえますか？」

「そう、恋？ 貴女が起こしてきたら？」

「み、命さんっ!？」

「それに……ね？」

「わ、分かりましたっ！」

恋が少し焦った様子で入ってきた入り口を出て、猩の休んでいる部屋に。パタパタと聞こえてきそうな急ぎ足で向かっていく。

「……………」 スースー

「おにーさん……起きてください。朝ですよ？」

「……………」

「シアンさんが、朝食を作っていますから……」

「……………!？」 ガバッ

「っ!?!」ビクッ

「あ、恋……。おはよう……。かな?」

「は、はい。おはようございます! おにーさん!」

「昨日はごめんな? 少しボーッとしてて余り覚えてないけど、確か……。命も昨日いたような?」

「はい、昨日は2人で泊まったんです。シアンさんの案で」

「そうか、すまなかった。それとさつき聞こえたんだけど」

「?? はい」

「シアンが今朝食を作っているのか?」

「はい、そうですよ?」

「……。とりあえず、2人の料理はまた別に作っておくよ……」

「どうしてですか?」

「シアンの料理なんだがな、少し特別でな……。どのくらいで完成しそうだった?」

「多分ですが、あと盛り付けで終わったはずです」

「……。量って、3〜4人分かな……」

「どうしたんですか? おにーさん?」

「とりあえず、食事をすることにしよう……」

そうやって、部屋を出てシアンたちのいるところへ向かうとそこには……  
箸を持ち青い顔をした命とキラキラ笑顔のシアンだった……

## 起床とバンドと……ネトゲ???

猩が起き上がり、恋と一緒に部屋に入ると箸を持ち、顔を青くした命とルンルン気分で料理を出しているシアンの姿が見えた。

「……シアン、とりあえず料理はそこに置いといてあとは座って置いてくれ。恋、命のこ  
と見といてくれるか？ 料理を一品新たに作っておくからさ……」

「え、えつと……ハイ……」

「命、大丈夫か？ 今新しいの作るからさ……飲み物でも飲んで待つてくれるか？」

「わ……分かったわ……。シアンさん、アナタの料理……独特な風味を感じたわ……私も感じたことのないくらいね……」

「み、命さん……少し飲み物飲んでください。紅茶にしますか？ それとも、お茶にしますか？」

「紅茶でお願い……ミルクは多めに、砂糖は無しでいいわ……」  
「了解です」

そう言つて、パタパタと足音を立てて、キッチンに向かい、狸にティーセットと茶葉を用意してもらい。お湯も貰い命の席に向かう。

「命さん、これどうぞ……ミルクティーならたしかに胃に優しいですものね……」

「ええ……少し前にチラツと見たことがあったけど、これほどありがたいのは身に染み  
たわ……。それに、恋の優しさも感じられるわ」

「え？　そうですか？」

「そうね、今までもそうだったけど、今なんて、すぐに飲めるように飲みやすい温度にし  
てくれているもの……そういう心遣い……私好きよ？」

「あ、ありがとうございます……」

恋はそう言われるとトレイで真つ赤に染まる顔を隠すのだった。そして、のんびり過ごしていると、料理が完成したようだ。

「ほら、命。これでも食っておけ。恋も同じなので構わないか？」

「う、うん。大丈夫ですよ、おにーさん」

「これは……リゾット？」

「ん？ ああ、そうだね。少し胃が荒れてるから少しでも負担を軽減するためにリゾットにしたよ。チーズ風味にしてね。」

「そう……ありがとう」

「さて、シアン。俺との約束忘れてたな……？」

「すいません、気分が高揚してしまい。約束のことを消失させてました……」

「謝る相手が違うからな？ とりあえず今回は俺も悪かったしな。だが、今後は約束を忘れずにする……分かった？」

「はい……気を付けます。命さんも申し訳ありませんでした……」

シアンは命に深々と謝罪するのだった。  
猩はそれを見るとシアンにも2人と同じリゾットを出した。

「シアンも、この料理を食べさせる訳にはいかないからな。他の2人と一緒にしたぞ？  
後に残っている料理は俺が食っておくからさ？」

「え……？」

そう言って、シアンの料理に手をかけ食べ始める猩。

それを見て顔を青ざめていく恋と命……命はその料理を体験しているからか、その異常さはより理解している。

その2人の目線を感じながらシアンの料理をモグモグと平らげていく。

「し、猩？　大丈夫なの……？」

「ん？　ああ、シアンの料理のことか。実はシアンの腕は料理に関しては俺以外には壊

滅的なんだよな」

「え？ それって……」

「別に俺が変ってわけじゃないんだよな。シアンの腕が異常で何故か俺以外にはヤバいものになるらしいんだよな……不思議だよな……」

「たしかに……おにーさん、味音痴ってわけではないし。逆に隠し味が分かる時あるよね？」

「そうよね……不思議だわ……」

「そういや、2人とも今日予定はあるんじゃないのか？ さつきからスマホ、振動しまくってるぞ？」

「え？ ……あああ!! 練習忘れてた!」

「とりあえず、準備しときな……メンバーはいつもの?」

「普段のメンバーだよ。バンドの練習あって、サークルってとこで集合だったんだけど……すっかり忘れてたわ」

「急ぎましょう! 命さん!」

「それ、俺も一緒に大丈夫か?」

「大丈夫! 今日+1名とってるから!」

「よし、なら……命バイク乗れたっけ?」



「乗れるようにしたわよ？　でも3人だと……」

「そしたら、俺が恋を後ろに乗せるから、命はそのままサークルに行ってくれ。後ろを追いかけるから」

「分かったわ」

「楽器は……どうする？　俺の使うか？」

「んー……一応今日は練習っていうけど、次のライブの会議なのよ」

「そうか、なら念のために用意はしておくよ。たしか……命はボーカルで恋はギターだったよな？」

「はい、そうですよ！」

「オツケー。準備できたか？　2人とも」

「大丈夫です！」

「いつでも行けるよ」

「よし、なら命先導は頼むよ。恋、後ろに乗ってしっかり掴んでくれよ？　怖かったら言ってくれ」

「了解です、おにーさん！」

その声を聞くと同時に命はバイクを出発した。

猩も遅れないように見失わないように、恋を後ろに乗ったことを確認し、出発するの  
だった……

---

「もー、みこつちゃんも恋ちゃんも猩くんも遅いよー!」

「社さん、ちゃん付けやめてくださいね?」

「えー、みこつちゃんはちゃん付けいいの?」

「命さんは、いいんですけど。社さんはちよつと……まあいいですよ」

「ハハハ、恋も諦めたか……」

「まあ、何度もやられれば諦めもするだろう。それで？ 今日どうする？」

「一応ライブに関してゝつてことで集まったけど……順番から決めてこーぜ」

「そうね、それと今回猩は演奏するのかしら？」

「んー、どうするかな。今回は観客として見るのもありだし、ラスイチで参加もあり……？」

「そうですね。ラストに参加からいつてもいいですね」

「なら、最後の曲は……新しく作ってみるか？」

「そうね、個人で作っていないのは……夕也と猩の2人だったわね」

「あー、まあ、そうだな……作らないとな……でも、さっぱり歌詞が浮かばないんだよな」

「別に絶対作れって訳じゃないさ。一応目処をつけて、1週間前くらいならなんとか対応可能だろうし」

「それじゃ、ラストは1週間前に確定だな。あと……2、3曲かな？」

「2曲ね。カバーでいいんじゃないかしら？ オリジナルで演奏したのたしか……」

「君の笑顔」と【C. T! Dream!!】だったよね？ そしたら……【交差する2つのオモイ】でいいんじゃないかな？」

「ええ!？」

「私はあの曲好きだな〜」

「なら、それにしますか？」

「そうしましょうか……あと1曲はカバーだね」

「オリジナルばつかだと、知らない人もいるからね。でも、何にしよつか？」

「それも、後に回していいんじゃない？ それで各自決めてきて、選曲！ どう？」

「構わないよ」

「それも面白そうですね！」

「良いと思うよ」

「よし！ なら、あとは遊びましょうか？」

「んー、そうね」

「5人か……ならアレでいいんじゃないか？」

「したら、ネット喫茶でやる？ それとも各自自宅？」

「自宅にしとこ、喫茶に行くのも面倒だしさ」

「ん？ 何をするんだ？」

「あ、おにーさん。実は……」

「あ、猩は自宅にPCとネットは入れてる？」

「調べることがあったから買ったけど……」

「あ、そしたらノーパソの俺が猩の家で教えながらやるよ」

「オツケー！ そしたら、初期のところで待ち合わせしてやりますかね！」

「あ、連絡先も加えないと！」

「そしたら私が招待しておきますね！」

「よしよし！ それじゃ、また後でね！」

「一応ノーパソ持ってきてたから、そのままいくか……」

「そうするか、夕也……で？ 結局何をするんだ？」

「始めてフルメンバーでやることになりそうだね！」

「ああ、猩はしたことないよな？ 最近5人でNFOを始めてたんだよ。パーティーは

6人組めるんだけどな……」

そうして、夕也からNFOの話聞きながら軽く演奏を通し、解散となった……

NFO～最東端の村～何処か見覚えが……？

「さて、猩。そろそろ始めるとするか」

「たしか……NFO……だったけ？」

「そう、NFOというのはだな。『Neo Fantasy Online』というやつでネットゲームだ。フレンドと会話する際チャット又はボイスチャットをする必要がある。今回は、ボイスチャットをするためにこのアプリを入れといてくれ」

そう言うように示していたアプリは、角の丸まった四角形に赤オレンジ色の斜め線が2つ入ったアプリであった。

「このアプリなら複数人でも会話できるし、何時ログインしたか分かるという優れたもの

だ。インストール……まあ、NFOをPCでしながらやろう。ってアップデートもきてたのか……」

「お、おう」

「そうだな、操作をする際どうする？　コントローラーを使うのとキーボードを使うことができるが……？」

「そうだな……キーボード操作はいきなり厳しいと思うから、コントローラー操作で頼む」

「了解。さて、アプリもインストールされたし、みんなのところに招待するぞ？」

すると、インストールされたアプリを開き、操作をテキパキとし、いつの間にかあのルームに招待されていた。

そのルームにはもう、5人入っていたのだった。

「このアイコンの下にある緑の4人っていうのがボイスチャットに参加している人数だ。つまり、いつものメンバーがもう参加していることを表しているんだ」

「てことは、これに入れば通話状態になるってことだな？」

「正解。さて、これに参加してNFOを進めていこう」

そうして、アイコンをタップし会話に参加するのだった。

すると先につけていたワイヤレスイヤホンから声が聞こえ始める。

『……それで、紅ちゃんは今回何でいくの？』

『私ですか？ 私は……って、猩くんっ!! いらっしやーい!!』

『ちよっ! 紅っ! 音量下げてっ!』

『大丈夫ですっ! 音量は個人個人で下げれるので!!』

『あはははっ……』

少し騒がしくなっていました。



『それで、夕也？ 猩はあとのくらいで入れるのかしら？』

『んん。一通り……アプリのことは話した！』

『アプリじゃなくNFOについては？』

『あつ……』

『………あとで、お仕置きするわ。絶対』

『えっ！ ちよっ！』

『さて、猩。説明は軽めにした方がいいかしら？ それとも、始まるここを含めた説明した方がいいかしら？ それとも、始まりの村に着いてから説明した方がいい？』

『あー！ 命さん、ずるくいつ！ 私が説明したいですっ！』

『まあまあ、落ち着いて。初心者になるのだから紅ちゃんが猩を守ってあげて欲しいのね？』

『………』

『こ、紅さん……？』

『ご、ごめんなさい。ちよつと衝撃が強くて……でもそれ最高っ!!』

『いい子ね？ さて、多分もうそろそろキャラクターの設定終わったかしら？』

『キャラクター制作のことだよな？ あとは職業設定だけが……みんなは何にしてる

んだ？』

『そうね……私は盗賊のシーフね。宝箱にかかった罠だったり、道にある危険物を取り除いたり……あとは、モンスターから素材をぶんどったりするやつね』

『私は弓使いのアーチャーだね。遠距離からチクチク攻撃する役割を今してるよ！』

『私はヒーラーで今……魔法使いも上げていきます。とある条件であげる職業がもうすぐ解放されるので……今回はヒーラーとして行きますね』

『俺はタンクの役割をしてる。最近やたら前に出るやつもいるが……なんとかな？』

『俺は戦士の役割をしてる。剣を使っではいるが……たまに攻撃をミスるがなんとかなってるよ』

『ふむふむ……なるほどな……軽くまとめておくぞ？』

命↓シーフ（盗賊）

紅↓アーチャー（シルフ）

恋↓ヒーラー（僧侶）

社↓タンク（盾使い）

夕也↓戦士（剣士）

『これで大丈夫かな？』

『そうそうオツケー！』

『これなら前衛の方がいいかな？』

『んー……まあ、みんな好きなの選んでいるし大丈夫じゃない？』

『なら、俺はこれにするかな？』

そう言つて、選択したのは魔法も使え、近接もできる魔法戦士であつた。

『これ、周りの状況みながらバランスとらないといけないわゆる上級者向けのやつだよ？ 慣れればかなり強いけど……』

『まあ、いいんじゃないか？』

『いいですよ！』

『ならこれにしとこうかな？』

そうして、魔法戦士を選択したのだった。だが、その時自分のアバターにノイズが走ったのは誰も気がつかなかった……

『……よし！ それじゃ始めるとするか！』

『そしたら、最初に噴水の前に立ってると思うけど、あまり遠くに行かないでね？ 今から向かうから』

『了解。軽く操作して、慣れておくよ』

そしてNFOをスタートする。

そして文字が流れ出す。

【welcome to NFO!!】

そして、画面が暗転し、少ししてロードを始める。

ロードを終えると村の風景が流れ出す。

いくつも建つ木造建築。

一際目立つ、冒険者ギルド。

八百屋の前で話をしている女性たち。

汗を流しながら、鎧を振り下ろし、カンカン鳴らし武器を整える男性など。

さまざまな村の様子が流れ始めた。

およそ全体を見たのか、村の中央部にある噴水にカメラが動く。すると……

先ほど作ったアバターが足元から形成される。

全体が作られるとカメラのアンクルが第三者視点から主観視点に変わる。

左上に緑と青のゲージがあり、その上に「○」とだけ付けられた名前があった。

自分の服装を確認すると普通の初心者用の防具一式と胸の高さくらいの長さの木剣が1つだけ装備されていた。

そして、あることに気づく。

「この風景を見たことがあることに……」

『もしもし？ おにーさん？』

『……………』

『あれ？ 聞こえてないのかな？』

『……………』

『どうしたんでしょう？ 会話は……切れてませんし……？』

『……いや、なんでもない。少し見覚えのある風景だっと思ってただけだ。始めてやるゲームなんだけどな。ははは……』

『まあ、会話切れてないなら大丈夫ね。とりあえず今そつちに向かっているから……あと3分くらいで着くわ』

『了解……今のうちに飲み物用意しておくよ』

そうして、画面から視線を離し、冷蔵庫からお茶の入ったペットボトルを取り出し、またPCの前に戻り視線を戻す。

その時には、お茶を取りに行く前にいなかった人物が到着していた。

『すまない、待たせた』

『ん？ 大丈夫大丈夫。さて何から話そう……？？』

『軽くこの世界について話をした方がいいかしら？』

『あ、そうだな。それじゃあ、説明をお願いしてもいいか？』

『それじゃあ、軽く説明しますね！』

『この国は、フライクベルトと呼ばれていて、中央部ではいつも戦争を起こしている大陸です。私たちが今いるのが最東端の最果ての村で……確か村の名前が……なんだっけ？』

『旅立ちの村と言われて、ゲームの中で一番安全な憩いの場所……まあセーフエリアだ』

な』

『そうそう！ まあ、村から出たとしてもモンスターはほとんど出ないしクエストも比較的簡単なやつばかりだから安心きてね！』

『そして、この村に村長がいて……ダンタイン？ だっけ？』

『ダンケインだよ？ たしか？』

『ダンケインだね』

『……ダンケイン……？』

『ん？ どうかしたの？』

『なんか……すごい懐かしいような……いや見たことがある気がする。その村長の名前も……それに大陸のフライクベルトも……始めてやるゲームなのにな……』

『んー、まあCMとかやってたからそれで見ただことあるのかも？ まあそのダンケインって言う村長は元々有名な勇者の一人なんだよね』

『まあ、怪我して戦えなくなっただけからこの村で長をしてるんだって』

『それで今回する予定なのは……下働きのジエイクって人の依頼を受ける予定だよ』

『変なことしなければすごく簡単なクエストだからまあ、強いモンスターがきても私たちがいれば大丈夫だけだね』

『確かTop10が2人だよな？』



『いや／＼やることなくして暇で暇で／＼あつ猩くんのことも守るよ?』

『手が空くことが多くて誘われること多くて……それと守る役割はタンクの俺な?』

そう言うのは紅と社の2人であつた。

調べてみると、2人は超難関クエストを初級職でノーダメクリアしたことがあるようだ。

遠距離から紅が適切な攻撃を加え、敵のヘイトを盾使いの社が攻撃を捌く。時々紅がヘイトをとることがあるが、すごい回避能力で全ての攻撃を回避するのだ……

『なるほどな……てことは、今回受ける依頼つてのがジエイクつて人の依頼なんだよな?』

『うん、その予定だよ?』

『そしたら時間を少しもらつていいかな? この村を少し探索してみたいし……』

『んー、そしたら少しだけ分かれて時間空けて合流する?』

『構わないわよ?』

『大丈夫ですよ』

『いいよ』

『了解』

『そしたら、私武器の手入れでもしてるわね』

『僕は、おにーさんのとこにいようかな』

『そしたら、俺と恋が村の探索にしようかな？』

『了解くじやあ、あとでね』

そうやって他の人は各自やっておきたいことがあるのかバラバラに動く。

そして、猩と恋が噴水の前に残った。

『それじゃあ、おにーさんどうする？』

『少し気になる場所があつてね。もしかしてあるのかな〜って思つて』

『気になる場所？』

『あるか分からないけどね？ でも、一度見ておこうと思つて、もしかしたら知ってる場

所かもしれないし……まああり得ないけどさ』

『気になるなら行ってみようよ。それで何もなければ全然かまわないですし……』

『ありがとな……恋』

『それじゃあ、行きましょう!!』

そうして、2人は噴水の前から歩き出した……

# NFO 村を一望できる墓

噴水の前から離れ、村から少し離れた道を歩いていく2人  
猩を先頭に進んでいき、恋はそれに付き添い共に歩んでいく

『……………』

『おにーさん？ いったいどこに向かっているの？ この先たしか高台で村全体見ることと誰かの墓しかないですよ？』

『高台で墓……………か……………。いや、その墓に今用事があるんだ。それに……………』  
『??？』

『多分……………いや、その墓で確証が持てそうなんだ。ごめんな？ 恋……………』

『いえいえ！ 僕もたまにこういうのもありだと思えますよ！ 戦いばかりだと疲れま  
すしー！』

『そうだな……………つと』

話しながら進み続け、とうとう村全体を見渡せる高台についた2人

その中央には墓石と供えられた花束があり、淡い紫の花びらが辺り一面、美しく舞っているのだった。

『あれ……？ 花が供えられているね？』

『この花は……』

『多分春紫苑かな？ それとも姫紫苑？ 前見たことあるけど……』

『いや、この花は紫苑だよ。春紫苑じゃない。似ているけど違うんだ』

『そうなんですネ……でも、なんでこれがあるんでしょう？ 前来た時は何も無かったのに……』

『それは分からないが、確証が取れた……ここは……』

その続きの言葉を繋げようとすると墓石から淡く光り始める。

その光源は全てを包み込むように優しい光であった。

『!? な、なんですか!!?』

『……………』

光がだんだん収まり、縮小していき、掌サイズになると弾け飛び、それに驚き目をつぶってしまった。

目を開くとその墓石の前にとある人物が立っていた。  
レモン色のドレスを纏い、銀色の髪をストレートに流した少女が立っていた。

『……………』

『これって……………新イベント……………? でもなんでこんなところで……………?』

『この村は元々、小さな街だった……………』

『え……………?』

『高い位置に小さな城……とまでいかないが建物が建っており、そこに姫様も住んでいたらしい。それはそれは美しく、街の人たちから慕われた優しい姫様だった。村の人たちとも仲が良く、姫様は時々こっそり、街の人たちと遊んで過ごしていた』

『……』

『とある日、ある少年がボロボロの姿のままこの街に運ばれてきた。片腕は取れ、片目には石が突き刺さっており、生きてるのか死んでいるのかわからない状態だった。たまたま遊びに来ていた、姫様はそれを見ていたのだろう。すぐに近づいて容体を見ていた』

そんな話をしながら、猩はその姫様の姿をジツと眺めていた。

その目は、寂しき・悲しみ・嬉しき……そして、ほんの少しの怒りを灯していた。

『その姫様とはある希少の魔法が使えた。それは治癒魔法で、普通の治療とは違い自身の体力を使い相手を癒す効果があった。その少年の怪我を治すために姫様は自分自身が出来なくなるまで体力を分けてくれたんだ。まあ、その甲斐もあり少年は生きることができた』

『おにーさん……?』

『まあ、話は飛ぶが……その姫様のおかげで死にかけた少年は生きれた。だが、とある魔族によつて街は滅んだつてことだけ』

『……その少年は、その姫様はどうしたんですか?』

『少年は冒険者になり、何処かにいつていて生き残れた。だが姫様は街の人たちをほぼ全員逃がし……死んだ』

「あら、こんな場所に来るなんて……何年振りかしら?」

『……ああ』

「来てもらつても申し訳ないけど、ここには誰かを待ち続ける亡霊しかいないわよ」

『……ああ』

「あれ? でもあなた……」

そう言つて亡霊の姫は狸の周りをぐるっと回ると正面に立つと何やら気づいたようだ。



「あなた、私と出会った少年に似てるわ……自分が傷ついても他人を心配する。何より家族を一番に親友をその次に思うその少年に……」

『そう……だな……』

「うんうんっ！　なら……君にならこの力を授けるよ！　私のもう一つの力！　治癒魔法もあつたけど、それよりもあなたに必要と思うこの魔法をあなたにつ！」

そうして、姫様は手を猩に向けてと光の球が現れ、猩に向かって飛んでいく。そしてその光は猩に触れると弾け、身体に入ってしまった。

「これは私が持つてる最強にもなり、最弱にもなる防御魔法。誰かを思う気持ちによる魔法……」

『……………』

「あなたなら、きっとこの魔法を扱えるはずよ……いつも……いつも私じゃない誰かを

思うあなたならね……それともう一つっ！」

姫様は手を地面に向けると丸型に象られ、土が掘り起こされる。すると、一つの宝箱が出現した。

「これは私の家から古くから伝わる武器。これをあなたに託すわ！ 何故かあなたになら、いえ。あなただからこそ！ これを託してもいいって思えるの」

「……」  
「もし、その少年がいたら本当はその子に託したかった。でも、あなたが来てくれた……あの子にすくつく似てるあなたが……」

「……」  
「でもねもし、あの子に会えたら私は……」

その次の言葉は聞こえなくなっていた。

猩と恋……2人が同時に瞬きをした瞬間、風が通り過ぎ再び目を開くと、姫様が首にかけていたネックレスが地面に刺さっていた。

そのネックレスは形は歪な姿をしているが、何年も何十年も経ったような錆がついていた。

そのネックレスを拾うとメッセージが2つ届く。

一つはアイテム用のメッセージ、もう一つは運営からのメッセージであった。アイテム用メッセージを見てみる。

### 【思いの出のネックレス】

このネックレスは製作者の思いが込められてるられており、効果は????。だが、これを装備できるものは複数の効果から一つ選択し、固定化することか可能である。(売却不可アイテム)

『……………』

『おにーさん……宝箱からはこれが出てきたよ』

『……やっぱりか』

恋が宝箱から出したのは一本の武器であった。その武器は持ち手の部分しかないが、魔導媒体が含まれていた。

猩は手を取ると魔力を流すと光り輝く。

その持ち手からは紫の光が帯び、長い棒になる。

軽く振り回すと鞭の様にしなり、巻き付いたり、剣の様に鋭い刃を持ち、ありとあらゆるモノを切り裂いていく。

ある程度、その武器を使用していき、動作確認をしていく。

その動きはまるで、歴戦の戦士が自身の武器を振り回す雰囲気を出していた。

### 【思想の引鉄】

思いにより、どんな武器にもなれる。鞭のようにしなり、剣のように鋭い一撃を出すこともできる。

杖の持ち手に繋げると威力が上がる。

『ありがとうな、恋……』

『ううん……大丈夫だよ。おにーさんこそ大丈夫？』

『ああ、大丈夫だよ……ここに来て良かった……そう、思えた』

『少し、時間空けて村に戻りましょう……』

『いや、ここは閉じると思う……多分、俺をずっと待っていたんだろうな……製作者もきつと……』

『??』

その言葉を聞き、問いただそうとし、振り向くと、メッセージを開き、何かを読んでいた。

『さて、待ち合わせのところに戻ろうか……今はこのNFOを楽しもう！』

『そう……ですね！ みなさんも待っていますから！』

そして、墓の前から2人が消えると、墓はだんだん消えていき、やがて完全に消え去った。墓のあつた場所にはあの姫様が立っており、笑顔で旅立ちを祝していた。

とある場所では、このイベントが発生した時。同じようにメッセージが届いていたことは、その本人しか知らない……

NFOの始まりの終わり、新イベ！そしてテスト期間は  
過ぎ去る

姫様の墓を去り、村に戻り噴水前に向かうと、とつくに着いて待っていたのか噴水近くのベンチに腰掛け話をしていた4人。

猩たちの姿が見えると紅はベンチから立ち上がり猩に向かい突進し始める。

『猩く〜ん!! 待ってたよ!!』

『ごめんごめん、少し近くでイベント入って終わらせてきたから』

『ん? イベント? この辺でイベントつてきてたっけ??』

『私も把握してないんですけど、多分隠しイベントだと思います。それも1人のみの  
……』

『えー!! それでそれで!? どんなイベントだったの!! 教えてっ!』

『簡単に伝えるなら……ここが昔、街があつて姫様がいた。みんなに慕われてる。で滅

ぶ。姫様亡くなる。守護霊として現れ、秘宝を託す……かな?』

『簡略しすぎじゃないの?』

『なんていうか、言葉で言いづらいというか……後ほど整理してイベント内容伝えますね!』

『それで、その姫様は何をくれたの?』

『武器でもあつて強化素材でもあるやつと、ネックレス……あとは特殊スキルだな』

『武器ついても、変化自在のやつですごい攻撃手段ができそうだよね』

『ネックレスに関しては……今は装備できないな……多分イベントか条件かな?』

『ふむふむ……さつき公式の見たら更新されて、新イベ始まるから多分それだね……でもおかしいよね?』

『ん? 何が?』

『だってさ、イベントある時っていつも事前に情報があるんだよ。でも、今回に限っては、無かった予定を埋めるかのように入ってきて……そう感じたんだ』

『なるほどな。それでイベント内容ってのは何が始まるんだ?』

『んーと……イベント内容は……』



いつもの様に2台目のPCを操作しているのか、キーボードを叩く音が二重に聞こえ始める。

そして、その音はすぐに消える。

『んー？ これなんだろ？ 【切貼切貼、蠢く猛獣】 ……らしい』

『これはなんて読むんだろうな？』

『……せつばせつば……だろうな。【せつばせつば、うごめくもうじゅう】と読むんだろう』

『でもこんなモンスターいたっけ？』

『新イベってことは、新モンスターだろうな』

『てことは、合成獣かな？ ありえるのは』

『てことはキマイラ？』

『いや、それはもう出てたよな？』

『そしたら……？ 分かんないね』

『とりあえず新イベも始まることだが……今回は猩はどうする？』

『ん？ 俺か？』

『一緒にやっていくか? そしたら軽くレベリングやって、多少は強くしていくか……』  
『それもいいが、今日はもうやめとこうか、そろそろそっちはテストの時期だったはずだろ?』

『『あつ……』』

『『……』』

『忘れてたんだな……声が二重に聞こえたから……夕也と多分紅かな?』

『だ、大丈夫ですよ猩くんっ!』

『赤点はない……はずっ!』

『あなたたち、それで赤点あったじゃない。夕也にいたってほぼ全部……。紅はたしか

……社会関係と英語だったかしら?』

『なんでそこまで覚えてるんですか!?!』

『い、いや赤点ギリギリだったけどセーフだっただろ!?!』

『赤点ギリギリでやるより普通に平均点とって安心させてくれ……とりあえず……んー

……』

画面の前では街の外で複数のモンスターを狩りながらレベリングしながら武器の使

い方や、立ち回り方を学んでいた。

『そうね、そしたら勉強会なんてどうかしら？ お泊まり会的にして、残り1週間詰め込むとしましょう』

『そしたら……どこに泊まるの？ 命さん家は？』

『私の家だと、こころがいるもの……勉強会になるとは限らないわ』

『私も同じですね……紗夜ねえならまだしも日菜ねえは一緒に遊びそう……』

『俺の家もパス、Roseliaのメンバーで勉強会らしい……』

『こつちも有咲がいて、ポピパのメンバーでお泊まり会最近してるから……』

『てことは俺か夕也か……夕也はどうだ？』

『まず、部屋狭いから雑魚寝になることからパスさせてもらおう』

『私は猩くんのとなりでも構わないわよ！』

『紅は落ち着け……とりあえず俺の家で泊まることで構わないが、家の場所を知ってるのは命と恋の2人だよな？』

『そうね、そしたら明日に荷物を持って猩の家に行くとするわ』

『命さんと恋くんは知ってるの？ まあいいけど……』

『たまたま会った時、家に来てもらったんだよ』

『とりあえず、今回は2人の赤点回避とその他のメンバーの苦手科目の点数増加目的だな』

『アレ? 猩は学校はどうしたの?』

『……ないな。一応俺はいない存在だしな。もしひっくり返したとしても中学中退……かな? まあ、入れなくはないけど……どっちでもいいかな。やることもあるし……』

『そう。あなたがそういうなら好きにきなさい。でも、気が変わったら声をかけてね?』

一緒に学校に行きたいって人もいるみたいだし……ね?』

『そうだな……まあ、全て終わってからもいいし慌てる必要もないし、ゆっくり確実に……だな』

『よし、じゃあ時間もちょうど良いし、今日は各自荷物持って俺んとこ来てくれよ』

『『『了解／分かったわ』』』』

その後、猩の家にメンバーが到着し

夜中、男女の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか……

無事2人は赤点回避し、他のメンバーは  
各教科の点数が上がっていらしい……

# NFO～頼まれた依頼と上に立つもの～

猩は紅と夕也の赤点を回避し、勉強会……及びお泊まり会の最終日メンバーたちは最終試験のため、食事をしつかりとり、学校へ各自向かっていく。その間、猩はNFOの時に届いたメッセージをみていた。

「たしか、あの装備を入手した時届いたメッセージは……これだったな」

そのメッセージには、住所と人物名が書かれていた。その人物を調べてみるとなんとNFOの創始者であるらしい。ある程度、手土産等準備し、その住所に向かう。

——NFO社——

「ここが、書かれてた住所……だよな？」

大きな建物が聳え立ち、NFOの社名とシンボルマークが中央に添えられていた。

「とりあえず、入って聞いてみるか……」

入り口に入り、すぐそばに受付があり、そこにいる受付嬢に話かける。

「すみません」

「は？ アンタなに？ ガキがこんなところにくるんじゃないよ」

その受付嬢は態度も悪く、人が来てからも肩肘を机の上に乗せ、頬杖をついて業務を行っていた。

その目には、明らかに面倒な客……いやガキが来たと見えるだろう。

「すみませんが、この場所に来てくれってメッセージに書かれてまして。呼び出しつて  
することができますか？ ○○って方なんですけど……」

「何でアンタなんかにはシャチョー呼ばないといけないの？ NFOのファンだか知らないけどさ、服装もしっかりしてないし、なに？ アンタ？」

「……………」



「黙ってないで、さっさと消えなさい。邪魔。警察呼ぶわよ」

「そうですか……じゃあいいです」

「はいはい、サヨナラ」

そう言って、受付から離れ、入り口も出る。NFO社の前でスマホを取り出し、電話をする。

その相手は「会おうとしている人物」であった。

『あ、もしもし?』

『やあ、君は誰だい? プライベートの電話を知ってるのは数人だが……』

『NFOにて、とある装備を入手した際に知りましたけど……』

『……?!?!? ああ! あの仕掛けか!! それで君の名前は? 今君はどこにいるんだい?』

『今はNFO社の前にいますが受付嬢に追い出されてね……あ、名前ですが……初谷真澄です』

『オツケー、なら私が今から向かおう……』

『受付の人たちには今日人が来るかもと連絡したはずだが……サボっているのか……』  
ボソッ

『ん？ 何か言いました？』

『いや、何でもないよ。それとこの単語に聞き覚えはあるかい？ 一路の希望と滞在、そして世界移動……ワールドスライドを……』

『……ええ、2つとも聞き覚えがありますね』

『そうか……!! そうか……っ!!』

話していると相手が納得したのか、涙声になっていた。

『すいませんが、もしかしてですが……』

『この後は直接会って話をしようではないか、我々の希望よ！ すぐ、そちらに向かいますので、お待ちください!!』ガチャ……ツーツー……

「電話、切られたな……それとあの話し方。多分あの人だろうな……」

そんなことを思っていると、NFO社の入り口から飛び出してくる、見覚えのある人物が目に入る。

「やっぱり……」

「やあやあ！ お待たせしました！ こちらにどうぞどうぞ！ ついてきてください  
！」

「久しぶりだな……シユート、いやシユートさんかな？」

「久しぶりですね！ ショウさん！ シユートと呼び捨てでいいですよ！」

そう言いながら、NFO社に連れられて受付を通る。

すると、受付嬢の顔が目につる。

その顔はだんだんと青く青く……まるでまずいことをしたと発覚したようだった。

「しゃ、シャチョー!! そのですね!!」

「やめなさい、みつともない。自分のやったことでしょうか？ 調べることもせず、自己完結……。あなたが勝手にやって失敗した……。ただ、それだけの話です」

「しゃ、シャチョーおお!!」

そのまま悲惨な声を聞きながらエレベーターに乗り上に進んでいく……。そして、豪華な扉の先に進むと、机と来訪者用の椅子が用意されていた。

「すみませんね、シヨウさん……」

「シヨウで構わない……つと、いや真澄でお願いします。まだ、俺は戻って来れていないのだから……」

「シヨウ……いえ、真澄さん。一ついいでしょうか？」

「ああ。大丈夫だけど……」

「あなたは……本当に戻ろうと思っっていますか？」

「……………」

「私自身も調べていましたが、死人にもうなっているんですよ……それなのに……！」

「分かつてる。分かつているさ……でも……」

「ですが、まだ身体が見つかっていないのです！ それが見つかったら判決もひっくり返るでしょう！」

「多分な……」

「それでもう一度聞きます。あなたは……！ 真澄さんは……！！ いえ、この場合はシヨウさんと言った方がいいでしょう。シヨウ、君は何をしたんだ？」

ずっと目を逸らしていたのだろう……

はつきり言われると見つめ直さないといけなくなる……

俺は……おれは………

「……そうですか、なら私もあなたの手伝いをすることにしましょう。それで真澄さん、あなたはアレをまだ持っていますか？」

「持っているよ。でも、何に使う気なんだ？」

「あなたがしたいことを応援するために必要なのです。ですのでそれをいただきたいのです」

「そっか……なら持つていってくれ」

そうして、手渡したのは大きな長方形の氷であった。長さは大体肩幅ほどの大きさで中身が見えない氷であった。

その氷は常温でも溶けることはなく、人肌でも溶けることはない。

それを社長は受け取る。

それと同時に解除用の呪符も渡した。

「これが氷を溶かすキーで、それを氷にくつつけると氷が砕かれる仕組みにしてるよ」  
「やはり、あなたはこういうのが得意なんですね……真澄さん」

「こうすることでもしかしたら治るかもって思っていたんだ。だけど、俺はこのままでもいいかなって……」

「現代でも、それを治すのは難しく、今はもうやめといた方がいいかもですね」

「ああ、そうだな。あとは任せていいかな？」

「ええ、構いませんよ？ あ、そうそう」

そう言って、机に向かう社長。

机から取り出したのは、大きなプレゼント箱であった。

「これですが、我が社からあなたに贈り物です。テスターとしてですが、これを贈ります。中身はあなたのアバターとその動きをトレースできる脳波を感じ、その動き通りに操作ができる機械です」

「それで……いや、新イベのことか……」

「ええ、あなたにはその中心人物になってほしいのです」

「それで何でそれを俺に？」

「それはですね……あなたがあの鎖を解いたからです。それでイベントが発生する仕組みだったのです」

「……………」

「実は、もう少し期間をあける予定だったのですが、部下の指示が通っていなくてですね。順番が逆になってしまったのです」

「ふむふむ……」

「私に、アレが解けたら連絡をする様にして、契約からイベント告知だったのですが、契約前にイベント告知をしてしまったのです」

「なるほどな……」

「充分な報酬も払いますし、あなたのしたいことを私個人で手伝いをしましょう」

「了解。ならこの依頼をやるにあたって、禁止事項、注意事項を教えてくださいか？ 例

えば、難攻不落の敵にするなとか？」

「大丈夫です。それに関しては自由にやってもらって。難しくなれば燃えるという人がこのゲームの世界の人たちは多いですからね」



「ほうほう」

「だから、気にせず葬ってください。何かあったら連絡を渡します。あ、こちらプライベート用の番号です。それと契約金に関してはこちらの用紙に……」

「了解。あ、それとそのエネミー用のアカウントはどうしたら？」

「あ、それはこちらですね」

そうすると複数の紙と封筒を渡された。

紙には、契約に関してと、別の垢のコードが書かれており、その名前も書かれている。名前は「○△」のみであり、読み方は自由らしい。

キャラクターの容姿も描かれているが昔の自分に類似していた。

「これって……」

「あ、気付きました？ このテスターはあなた個人しかできないんです。もともとあの仕掛けもあなたしか分からないでしょうし」

「あはは……そうだったのか……」

「では、私も仕事をしてきますか……あなたとの契約もありますし！」

「……………」

「やっぱり悩んでいますか？ やはりやめますか？ 今だったら、私、これを返しますよ

？」

「……………!？」

猩の心では、これをするべきだ！ つと思っているが、頭では、これをするべきではない！ つと自問自答状態……

これをしたら自分は今度は消えてしまうのでは……

そんなことを考えていた……

「別に私はどちらに動いても構いませんよ？ 今度は私もありますから……」

「……………いや、やろう。やることに決めた」

不安しかなかったが、結局はこの道に進むしか……進歩が見つからなかったのだ……

「それでは、場所は私に任せてください。あなた自身もすることを忘れずに……ね？」  
「そうだな……そつちは任せるよ？」

そう言つて席を立ち、扉に向かい歩く

それに何か気づいたのか、振り返りメモを残す。

「これ、忘れてたけど、こつちの連絡も渡しておくよ。何かあったら……これによるし  
く」

「やっぱり、忘れてませんね……」

「気づいてたのか……」

「あなたはしっかりものでしたから。少し驚いてますよ？」

「それじゃ頼むよ？」

「そちらもね」

今度こそ、部屋を退出する。

刃の行き着く場所は？

もとの鞆の位置に戻るのか……？

それとも、二度と戻ることはないのか……？

剣はもう、抜かれている。

## NFOを終え、ライブの練習の前の喧騒

NFO社での出来事を終え、自宅に戻り貰ったモノをゲーム部屋にセットする。新イベントまではまだ期間があるが先に準備を済ませておく。

色々な準備を終え、スマホをふと見ると連絡が入っていた。

それは、命からで「これから練習するけど聴きにくる？」とのことですぐに返事をし、外へ飛び出した。

少しして、サークルの前で命たちがいた。

みんなは学校帰りだったのか、制服のまままで各自自分の楽器を持っていた。

「ごめん、待たせたか？」

「いいえ、私たちも今来たところだから大丈夫よ」

「NFO振りだな、し……真澄」

「ああ、それと今日はどんな練習予定なんだ？」

「おにーさん、それはね。もう少しで私達含めた6バンドでライブすることになったんだ」

「6バンド？ ああ……最近良く情報誌に掲載されてるアレか」

「そうそう……って他人事じゃないわよ？ 私達だって掲載されているわ。まあ、最近だと新メンバーについてが多いみたいだけどね」

そう言っで見せてきた雑誌には「イマをときめくバンドたち！」と表紙にデカデカと書かれており、バンド名が複数掲載されていた。

少し中身を見てみると、バンドの結成された時や、初ライブの事やら色々書かれていた。

「色々と調べているんだな。この人たちは」

「そうね、でも適度にして欲しいこともあるわ。たまに限度を超える記者もいるし……」  
「そうですね……流石に追われた時はびっくりしました……たまたま夕也さんや社さんがいたから良かったんですけど……紅さんや命さんだけだったら……」

「いやいや、恋もそうだからな？」

「へ??」

そうこう話していると、恋の背後からいきなり飛びついてきた人物がいた。

「れ——ん!!!」

「わっ! つてびつくりしたな……日菜ねえ! いきなりはやめてよ!」

「えへへ♪ だつて恋がいたんだもんっ! あっ! みんな恋のバンドメンバー?」

「そうだけど、日菜ねえは何でここに?」

「今日はねー練習の予定だったんだけどさー。なんか練習室が整備中で練習できなく

なっちゃってそれでみんなでサークルで練習しよって話になってたんだー！」

「みんなって……パスパレのメンバーってこと!？」

「うん！ そーだよ！ そろそろ来ると思うし……あつ！ 合同練習しよーよ！ その

方がるんっ♪ ってくるし!!」

「い、いやこつちも今……えつと……そう！ 新曲やつてるからさ……ね?」

「え!! 新曲!! 聞きたい聞きたい聞きたいっ!」

「ごめんなさいね、蓮のお姉さん。これは内緒の話なの。まあ、話しちゃったけどね……

でもこの曲は聞くのは駄目よ? これはメンバーの約束だもの」

「えー、そんなこと言わずにさー」

「駄目なものは駄目。さあ、私達も早く部屋に移動するわよ」

「パスパレのみんなが来るってことは……」ボソツ

「そう言うことだから、日菜ねえ、本番の時に披露するからね? 楽しみにしてて?」

そう言って離れようとする、後ろから声をかけられる。



「ひ、日菜ちゃん！ 早いって〜！ 楽しみにしてるのはいいけど、急に走らないでよく〜！」

「ひ、日菜さんっ！ ここにいたんですか……っつて命さんっ!?!」

「チ、チサトさんっ！ だ、ダイジョーブですか!?!」

「きゅ、急に走り始めるから……それに合わせて…………」

「!!!?」

「…………」

「あー！ みんなー遅いよー！ あ、この子が弟の蓮だよ!! かわいいでしょー!」

「ひ、日菜ねえ!! かわいいは無いでしょ!」

「え、かわいいよね?」

「まあ、時々女の子に見える節があるわね……」

「み、命さんっ!?!」

「それより、さっさと部屋に移動するぞ? 時間も限られているからな」

「そ、そうだね!」

そう言って、移動しようとする……

話しかけてくる人物がいた。

「あつ！ あの!!」

そう……見慣れたピンクの髪色。少し変わったTシャツを着ている彩が話しかけてきた。

「……………どうしたのかな？ 丸山さん？」

「あの、千聖ちゃんとその前のことでお礼をいいたくて……………!」

「大丈夫だよ、それよりあの後無事だったみたいだね？」

「う、うん。千聖ちゃんがお店まで行ってくれて……………」

「そっか……………良かった」

「それでお礼を千聖ちゃんとしたいんですけど……………」

彩がそう言うと、他のメンバーたち……命や恋、紅、夕也、社が冷や汗をかいていた。

「お礼……つか」

「そ、それで考えつかなくて……食事でもって……!」

「悪いけど遠慮しておくよ」

「で、でも!」

「君たちはアイドルだ。1人の男性を食事に誘って、それを記者に見られてしまったら、それは火種になりかねない。それに……」

「う、うん」

「それ……に……。いや、これ以上はやめとこう。自分が抑えきれなくなるから」

「……はい」

「ごめんね。でも、その思いやりは受け取っておく。そのどこまでもまっすぐで折れない心……いつまでも持っていてね?」

「真澄。そろそろいくよ? 社が鍵を貰ってきたから」

「ああ。もう取ってきたのか。了解。それじゃあ、練習頑張つてね」

そう言ってパスパレのメンバーと別れ、サークルに入っていく。

みんなは、冷や汗をかいてドキドキしているだろう。

そして、同時に違和感を持ったことだろう。

実声を聞いて、その手にも触れたはずなのに、彩が猩のことに気づかないことに……

「……ねえ」

「どうした？ みこも。」ガントツ

命に話しかけられたと同時に首根っこ掴まれ壁に押し付けられた。

その表情は怒りを全面にでていたが、目だけは、悲しみを表していた。

「……私がいいたいこと……いえ、私たちが言いたいこと分かるわよね？」

「……」

「答えなさい……」

「……………」

「答えなさいっ!!」

「少し仕掛けをつけただけだよ。それだけ……」

「その仕掛けってなに？」

「言わない」

「言いなさいっ!」

「言わない」

「……………そう。ならもう帰って……………」

「……………ああ、そうするよ」

「おにーさん……………」

「理想だけで生きていけたら良かったのにな……………一緒にいたい……………それだけの願いもね」

「っ! だったら!!」

「だけど、感情だけで動く幸せが逃げていっちゃまうよ。痛いしつぺ返しもくらう」

「……………っ!」

「それじゃあな。期間空けてまたくるよ」

「……………」

「待て」

「どうした？ 社？」

「また、いなくなるのか？」

「少なくとも、覚えている限りいなくなることはないよ」

「……………分かった」

その一言を聞き、今度こそ、練習部屋から出て行く。

そのまま出口を飛び出し、自宅にむかう。

「み、命さん？」

「ごめんなさいね。どうしても抑えきれなくて……………」

「分かっていきます。命さんはおにーさんのためにしたってことも……」

「前もそうよ。気づかずに日々が過ぎて、気づいたらもう遅かったもの……」

「遅いことはありません」

「……え？」

涙を流している命は悔やんでいたが、一言を聞いた時、恋の方にむいた。

「前は取り返しのつかないくらい遅かったです。でも、今だったら全然間に合います。だから、私たちにできることをしましょう？」

「できること……」

「今の私たちには、やることが限られています。だからひとまず……」

そうして、部屋の中を歩きだし、ある場所で止まる。

それは楽器の前であった。

「今、私たちがすることは練習をし、演奏……そして、思いを届けることではないのでしょうか？」

そうすると一人、また一人と自分の楽器に向かっていく。

「命さん、あなたはボーカルですね？ そしたら、思いを感情を歌にのせて届けるべきでしょう？」

「……」

「たしかに、その手を取ってくれなかったかもしれませんが。ですが、今できることをしなかつたら今後また、同じことを繰り返すだけです。なら、今するのは、その後悔を抑えるために演奏しましょう」

「そうね……」

「歌は武器になります。抑止力ともなりますし、固く閉じられた扉を壊せます。ならば



……。外人にも伝わります……。！」

そう言つて、楽器を鳴らし始める。

それは、いつもと違い、力強さがあつた。

「その扉、壊しましょうっ！　そして、一人のあの人に近寄つて、支えてあげましょうっ  
！！」

それは、その姿は誰よりもきつと輝いていたんだろう。

眩しくて、でも霞むほどじやなく。それで心地良くて……

それはきつと太陽に近いナニカだろう……

だが、その太陽も影に食われてしまうだろう……

それでも、その輝きはとどまることはないのか？

それとも、影にのまれ、闇が支配するのか？

暗き部屋の中で怪しく光るランプと機械的な箱の前でたたずむ、人影……  
機械的な箱を大切なモノを扱うかのように壊さないように優しく撫でた……

「そろそろ、あの計画も始めていきますかね……」

「嘘を現実に変える……計画をね……」

「……………」

「本当にいいんだな？」

「言わなくても分かるだろ？ これは望んでやることだよ」

「分かった。では、これはその時に……」

「任せるよ」

暗き部屋の中でランプの光が消える。

それと同時に笑い声が響き渡る……

さあ、これは夢なのか？ それとも現実なのか？

開始の鐘はまだ鳴り響くことはない……

熱い?冷たい?まりなの話と夕焼けとの出会い?

メンバー達と軽い衝突を起こし、早めに帰った猩は、そのまま自宅に戻る  
他のメンバー達は、猩がいなくなった後話し合いをし、決意を固くする……

そんなことがあつた次の日……

「……それで、今日は何の用だ? まりな?」

「実はね、頼みたいことがあつてね……あ、これ冷やしてくれる?」

「それって、持ってきた書類と何か関係が？ それと、冷やすのそつちでもできるだろ？」

「そうそう、実はオーナーからまた、合同ライブを開催してくれって頼まれちゃって……冷やすのそつちのほう上手いでしょ？」

「合同ライブ？ それで、こつちのメンバーを参加させろって？ まあ、まりながやるとコップごと凍りそうだもんな……貸して」

「それもそうなんだけど、他のバンドの子達も参加させないといけなくて。そつちのメンバー、ほぼ全バンドの子達と連絡とれるでしょ？ あ、お願いね？」

「あー……メンバー見てみると一部そうだが……なんとかなるか……？ まあ、とりあえず会ってみないと分からないが……。あ、そしたら俺の代わりにあつためといて」

「一応だけど、香澄ちゃん……あ、ポピパの子なんだけど、その子にもまた、頼んでおいたけど……。はい、それ貸して、あつためとくね」

「これ、頼むな？ ……で、この計画は前回5バンドで成功したから、もう一つあるバンド増やして開催つてとこか……。はい、冷やしといた」

「ありがと。で、オーナーがまた開催しようつてなつてね……。ホント急に……。こつちもあつためたよ」

「なるほどな、とりあえずメンバーには……。いや、これは香澄つて子に任せるか。俺は、

他のバンドに伝えておくか……。あ、冷やしてくれてありがとう」

「んー、でもそっちのメンバーってどこで練習してるっけ?」

「今だったらサークルでとってるし、取れなかったら、メンバーの各自が場所を取ってるからな……。あ、その板チョコもとってくれるか?」

「なるほどね……。OK。そしたら香澄ちゃんにも一言言っておくね? このビターチョコ? はい」

「そうそうそれぞれ。で、開催する日は何日? あまり伝えるの遅すぎると練習もでき

んからな……」

「んー、たしかあと3週間かな?」

「3週間ね……」

そういつて、2人とも飲み物に口をつけ、一息とる。

2人とも、飲み物は適した温度になっており、あまり口を出したりしない。

「とりあえず、練習期間が少ないなら早めに連絡をとることにしよう。まず、2つのバン

ドが関わりのある場所に向かえば、連絡はとれるだろうし。その後2バンドにも話とれるだろうな……ただ、残りの1バンドは少し移動しないと……」

「ほぼAfterglowの子達はここにいて、パスパレの子はここでバイトしてるから……」

「それは知ってるから先に行こうと思っていたから大丈夫だ。ただ、その……ポピパ？のメンバーだよな……」

「Poppin, Partyね。あ、連携について？ それは私が伝えとくから大丈夫だよ？」

「なら、RoseliaとAfterglowのメンバーにはこちらから声かけしとくから他を頼むって伝えといてくれ」

「ん。オツケー。香澄ちゃんたちにはハロハピとパスパレを任せて、猩はRoseliaとアフグロね」

「RoseliaとAfterglowね……Roseliaは連絡とれるかな？ Afterglowはたしか商店街が拠点だったよな？」

「そうそう、その飲み物がすごく美味しくてね。あ、デザートの方も美味しいからね？」

「へえ……、まあさっそく行ってくるとするか。それと夜飯食って行くのか？」

「あー、お願い。今日は美味しいの期待してるよ?」

「それはいつも通りのやつでいいのか?」

「うんうん、こっちの料理も美味しいけどさあっちの料理も忘れられないんだよね」

「たしかにね。美味しいやつもあつたものね」

「懐かしいな……」

「そうだね……」

そうして、2人は飲み物を一口飲む。

軽く、皿に乗ったクッキーを一口口に含み、飲み込む……すると

「はああ……驚きなれたけど、やっぱエンカの幸運高いよね。キミ」

「普通にしているつもりなんだけどな」

「まあ、いつか。とりあえずその話は後で聞くから、合同ライブについての説明を2組に伝えてきてね」

「オッケー。それじゃ行ってくるよ」その帰りに材料も買ってくるし」



「はーい。いつてらっしやい〜」

そうして、家から出て、商店街に向かい歩いて行く。

〈商店街・羽沢珈琲店前〉

ここは、いつも日中は賑わっている。

(といっても最近の事しか知らないが)

とある肉屋では元気いっぱい挨拶が聞こえ、

とある八百屋では、少し気怠げだが、しっかりしている声が聞こえる。

今回は、とある珈琲屋に用事がある。

この珈琲屋は(まりなから)聞いた話によるとAfterglowのメンバーの一人の親が経営している店らしい。

時々、メンバーが揃って談話したりしているらしい。

さっそく入ってみるとしよう。

「いらつしやいませ〜」

店の中は落ち着いた雰囲気のでており、どこか安心感も感じられた。

客もちらほら入っており、奥のテーブル席には赤やピンク、黒などカラフルな髪色で染まっていた。

店員の子は茶髪のショートで笑顔の似合う元気な人であった。

「お一人様でよろしいですか?」

「ああ……ん? 少しすまない」

店員に断りを入れ、スマホを見ると、「私もコーヒー飲みたいからそっちいくね!」

との、連絡が入っていた。

「あとかは1人合流するから2人席でお願い」

「はい、かしこまりました！ では、こちらへどうぞ！」

そう言って、2人席用のテーブル席に案内され、メニューと一緒にお冷をテーブルにセツトされた。

「ご注文が決まりましたら、声をおかけください！」

そう言って、自分のテーブル席を離れ用とした時、急いで声をかけ、止めた。

「ああ、ちよつといいかな?」

「はい? なんででしょうか?」

「Afterglowって知ってる? 聞いた話によると、ここを拠点……というより

現れやすいって聞いたんだけど」

「え、えつとですね」

店員が言い淀んでいると、後ろから声をかけられた。

「ねえ、アンタ。ウチのつぐみに何の用?」

「ただ、Afterglowが今いるか聞いてるだけだけど?」

「それでAfterglowのつぐみにそれ聞いてるの? アンタ、バカじゃないの?」

「ああ、君たちがAfterglowか……それはごめんな。最近戻ってきたばつかだね」

「それで、アタシたちに何の用?」

「今、複数のバンドを集めてイベントをしようと思ってるんだ。それで君たち、After

erglowも参加をどうかなって」

「別にアンタんところにするつもりもないから」

「ら、蘭ちゃん!？」

「ふむ、Afterglowは不参加と……了解。なら先方に伝えておくよ。ありがとうね」

「ほら、つぐみいくよ」

「あ、ちよつと蘭ちゃん! す、すいません!」

「いや、急のことだからね。あ、おすすめのコーヒーをホットで。連れは後で注文させるよ」

「は、はい。オリジナルブレンドコーヒーをホット1つですね! かしこまりました」

そうやって、そそくさと注文を流しにいき、そのまま蘭と呼ばれた子のいる髪のカラフルなテーブルに向かっていった。

その姿をみたあと、スマホをつけ、まりなに『Afterglow不参加』と、連絡をいれ。商品の出来上がりを待っていると……

入り口から急いでこちらに向かうまりなはいた。

「ちよ、Afterglow不参加って本当?!」

「ああ、今本人に確認したとこ、不参加だそう。まあ、他のバンドや俺たちのバンドもあるからいいだろう?」

「そっか……じゃあ、仕方がないね」

「あとは、Roseliaか……そっちは予約入って無いんだよな?」

「うん、今日は予約は入って無いね。そしたら学校に向かっていったらどうかな? 紗夜ちゃんなら多分いるだろうし」

「紗夜……ああ、でも何でそのことを?」

「日菜ちゃんがね、『明日、おねーちゃんたち誘おうとしたけど、おねーちゃん風紀委員の方の仕事があるし、恋くんもバンドの練習でいないし……ズズズーンだよ』って言うってだから」

「なるほどな。まりな、先注文したからお前も注文しときな」

「そうだね、あ! つぐみちゃん、注文いい?」

「はい、ただいま……って、まりなさん。いらっしやいませ。ご注文をどうぞ!」

「アイスカフェラテでお願いね!」

「はい、アイスカフェラテお一つですね。一緒にお持ちいたしますね！」

そう言つて、つぐみはカウンターに行き、注文を伝え、すぐこちらに飲み物2つをトレイに乗せ、こちらに戻ってきた。

「はい、こちらホットブレンドコーヒーとアイスカフェラテになります」

「ありがとうね、つぐみちゃん！」

「いえいえ、それより……もしかしてですけど先程のライブの件つてまりなさんのところでやるライブでしたか？」

「うん、そうなんだけど……まあ、急な話だったものね。また今度やるとき早めに教えるね！」

「すいません、少々時間いただきますね。もう一度みんなに聞いてきます」

「うん、まだ確定つて訳じゃないけど3週間後くらいに開催予定だよ」

「ありがとうございます！」

そう言うとき急いでメンバーのところに行くつぐみ

まりなたちは注文した飲み物を飲んで息を吐く

「それで、紗夜はどここの学校なんだ?」

「えっと、花咲川だったかな? 場所はここだよ」

「ふむ……ここからならバイクで行った方が早いか……分かった。とりあえずこれ飲んでから向かうとするよ」

「うん、わたしもこれ飲んだらすぐ戻らないと……少しだけ時間もらえたからね」

「そしたら、俺が送っていいこうか?」

「あ、ありがとくそれじゃお願いしようかな」

「オツケー。なら、あとは返事を待つだけだな」

「すいません、お待たせしました。Afterglowですが、参加させていただきます  
！」

「だそうだ、まりな」

「良かったく、参加してくれて！」



「なら、さっさと他のバンドにも連絡入れるぞ」

「わわわ！ ちょっと待って！ あとこの一口だけっ！」

「バイク取り行くから、少し待たせるから。飲む時間はある。お金置いとくぞ」

「あ、ありがと〜！」

「とりあえず千円置いとくから後でお釣り渡してくれよ？」

「はい」

そうして、真澄は羽沢珈琲店を出ていく。

テーブル席にはまりなとつぐみが残っていた。

「あの、まりなさん」

「ん？ どうしたの、つぐみちゃん？」

「今の人ですけど、もしかしてまりなさんの彼氏さんですか？」

「あはは……、彼氏彼女の関係じゃないよ？ どちらかといえば……相棒かな？」

「相棒ですか？ でもおふたり、よくお似合いだと思いますけど……」

「んー、彼氏彼女にはなれるけど、結婚までは出来ないよー」

「え? そうなんですか?」

「だって彼……まだ中3だよ? 本来ならね」

「え、えええええ!!」

つぐみは周囲に聞こえるような大きな声で叫んだ。

その叫び声で店長もAfterglowのメンバーも驚いていた。

「もー、驚きすぎだよ! つぐみちゃん」

「え、あ、す、すいません!」

「まあ、それ以外にも理由はあるけどね。あ、そろそろ来るみたいだからお会計お願いね  
!」

「分かりました」

まりなは会計を済ませ、外に出るとバイクに乗った真澄がいた。真澄はまりなに向けて、ヘルメットを投げると後ろに親指を向ける。まりなはヘルメットを被り、後ろに乗ると、サークルに向けてバイクが発進する。

「そういえば、免許とって1年たってる？」

「……………」

「まさか……………」

「さっさとサークルまで送るから。急ぐぞ」

「……………後で説教ね」

「……………帰り、また連絡しろよ」

「その時は自転車で迎えに来てね！」

「バイク……………楽なんだがな……………」

「安全第一っ！」  
「ゴスゴス」

「そう言いながら、背中殴るんじゃない！  
危ないから！」

とある車道では、2人乗りしている後ろの女性が、運転している男性を見かけるので  
あつた……

花咲川女子学園にやってきたあああ!!

まりなをバイクでサークルに送り届け、そのまま花咲川女子学園に向かう真澄。学園につくと、門の前に警備員が立っていた。警備員は自分に気づくと近づき話かけてきた。

「あー、君。ここに何しにきたの?」

「すみません、こちらに紗夜……氷川紗夜という方がいるのですが。呼んでもらってもよろしいですか? 自分、初谷真澄といいます」

「んー、ちよつと待ってね。とりあえず君のこと聞いて……ん?」

「少し聞いていいかな? 前にNFO社の時会わなかった?」

「NFO社の時……? あー!! あの時の警備員さんですか!」

「やっぱりね……。君のことは社長から聞いてるよ。それでここに派遣されてきたんだ。この理事長、社長とめっちゃ仲良いらしくってね」

「なるほど……。話切ってしまうのですが、紗夜に連絡をお願いしますか?」

「はい、大丈夫ですよ。すぐお伝えします」

そう言つて警備員は自分から離れ、門の所に戻ると受話器をとり、何処かに連絡を入れていた。

少し待っていると、此方に向かい走つてきていた。その手には何やら札を持っていた。

「お待たせ。すぐ案内がくるからこれを首にかけてここで待つていてくれるかい?」

「あ、ありがとうございます。それじゃ、ここで待つてますね」

「いいよ。君は我が社の英雄だからね!」

「……英雄……ね……」 ボソッ

「ん? どうかした?」

「いえ、此方の問題なので。案内も来たっぼいので、そろそろ……」

「うん、あ、札を返すときは一度ここにくるか、理事長に聞いてね？」

「あ、分かりました」

そうすると校舎の方からパタパタッと急いで向かってくる女性がいた。

「どうも、真澄さん……でよろしかったですよね？」

「ええ、初谷真澄です。『はじめまして』」

「ええ、『はじめまして』私はここ、花咲川で理事長をしています。華崎霞といます。ア  
ナタのことはあの人からも聞いてますよ」

「なるほどね。それじゃ案内お願いします」

「ええ、氷川さんにも連絡はいれているから安心してね。それにしても……」

「ん？」

「……いいえ、なんでもないわ。ついてきて」

「? ……ええ」

そうして理事長に連れられ、花咲川に入っていく真澄。

教師専用の入り口を通って、校舎に入っていく。

向かった先は理事長室であつたが、迷わず二人とも入っていく、理事長は正面にある机をまわり、椅子に座つた。

「さて、それで? ここにきたのは紗夜ちゃんに会うだけなの?」

「んー。まあ、さつきまではそうだったな。今は違うけど」

「そう……なら、これ渡しておくわ」

そうすると机の中から一つの札を出し、此方に向けて投げてきた。



その札は高速回転しながら、此方に向かつてくるが真澄はそれをヒラリとかわす……

「あぶなっ!! いきなり投げてくるなよ!」

「なにも言わずに来たのが悪いわよ。アンタ。名前も変えてることから自宅にも帰ってないんでしょ?」

「正解……まあ、仕方がないことだからな。死んだことにされてるし。今出たとしても『はい、じゃあ元に戻しましょう』って訳にもいかないだろう?」

「アンタ……はあ。まあいいわ。とりあえず紗夜ちゃんに会うなら風紀委員室に向かいなさい。これ地図だから」

そう言つて机の上にポンつと地図を出された。

その地図を貰い、部屋を出ようとすると……

「私が今、ここで理事長になっっているのにも理由はあるわ。まあ祖母から代替わりというのもあるけどね」

理事長が語り始める

「アンタも知っている通り、私は子どもが好きよ？ でもね、小学生とか中学生より高校生の子どもが好きなの。だって、小学生や中学生はね夢っていても「仮面ライダーになりたい」とか「アニメのキャラと結婚したい」とか非現実なものばっかじゃない？ でもね、高校生ってのは現実も見ないといけないの。私の学校はね、その夢が何なのかを面接で聞いているわ。まあ、それが合否に関わってるとは言わないけど、でもね？」

そのいつにも増して真剣さが表れる様子を見て、しつかり聞き逃すことのないよう、聞く体制を整える。

「私が心惹かれるような……そんな夢を語ってくれる子たちもいるの。【ブシドーを指したい】【ランドをつくりたい】とかね。でも、その中に輝くものがあつたの。【キラキラドキドキしたい】っていういつまでも忘れない輝くナニカを持つてる子、【アイドルを目指したい】って思いながら、もう一つの本心を隠しながら進んでいく子……。私はそんな子たちをね支えてあげたいと思って理事長になつたの」

その瞳は真澄の目を……心の中を通し見るようにじつと見つめていた。

「アンタにも今、目標はあるんでしょ？　でも、その方法はほぼ全てを傷つけることになるわよ？　その覚悟はあるの？」

「覚悟ならとつくにできてるよ。暴走した車のようにブレーキは壊れてる。もう止まれないんだよ」

そう言つて、理事長室から出て行く。

扉はだんだんと閉まつていき、パタンと完璧に閉まつたあと理事長はため息を吐く。

「はあ……。別に暴走してるわけではないでしょ……。人に育てられて、飛び方を忘れた鳥のようにアナタはブレーキの押し方を忘れて止まれなくなつてるだけなのに……。なんのために仲間たちがいると思つているのよっ……。！」

理事長室の中では悔しがる声と涙が溢れ落ちる音が響きわたる。

——— 風紀委員室前 ———

とりあえずここまで来たけど、紗夜つて風紀委員なんだな……。まあたしかに真面目さ

もあるし適任なんだろう。

ひとまずノックからして反応を待つとするか。

「すいません」コンコン

「はあゝい。どうぞゝ」

「ここに紗夜……氷川紗夜さんがいると聞いたのですが、いらつしやいますか？」

「紗夜ちゃん？ ちょっと待ってね……あつ君の名前は？」ガチャツ

「ああ、初谷真澄です。どうも」

「あら？ どうも風紀委員の華崎雫です。紗夜ちゃんなら今は見回り中だからこの中で待っててねゝ」

「ああ、すいません」

そう言われ、中に入るといくつもの机があり、2つの机には書類がいくつか溜まっていた。その片方は書類が少しと金属製の箱がのつており、もう片方は山がいくつか溜まっていた。

「………仕事でたつたんですね。すみません忙しいときに」

「いいのよ、話し相手もいないと書類も進まないし。それに気になったこともあるし………ね?」

書類の山がある方の机に向かい話してくると、その書類を捌きながら続きを話していく。

「それにしても………紗夜ちゃんにこんな男性がいるなんて………!! もしかして………彼氏?」

「いえいえ、自分に紗夜は合いませんよ」

「そんなこといって、それで! どこで紗夜ちゃんと出会ったの?」

「出会い………か。んー、たしか。カフェにいて、それで帰ろうとしたらぶつかってきて、何も言わずに走り去ったんだよ。で、偶々紗夜の弟と面識があつてな? 姉がいること

を聞いていて、外見がそれに合ってたからこの人が紗夜なんだなって……まあこのくらいかな」

「へへ、他にはないの〜?」ニヤニヤ

「あとは紗夜自身に聞いてね」

そんな話をしていると扉からノック音が聞こえる。

「あつ、帰ってきたかな? 初谷くん、開けてもらっていいかな?」

「え? まあいいですけど……」

そうして、扉の前に立ち、扉を開けようとしたその時……

扉の側から懐かしい感じを体に浴び、扉から離れると扉が二つ折りになるように山側が此方に飛んできた。

それは空気を切り、速度にのせ此方を貫こうとする勢いであった。

そのことに気づくと急いでそこから回避しようとするが、扉の飛ぶ先をみると華崎雫にあたるような軌道で飛んでいた。

腰に下げていた鞭を取り出し、壊れた扉に向かい振りかざす。

すると鞭は破片に巻きつき、絡め取られる。

鞭の反対の手で、扉の破片を乗せると……今は無き扉の先から華崎雫と似たような女性と氷川紗夜がいた。

紗夜は女性のしたことに驚き、女性は蹴り破いたであろう足を戻すとズカズカと部屋に入ってくる。

「おい、アンタ。ここになんかようか？　ここ男性厳禁なんだが」

「もー、零ちゃんつたら……また扉壊して〜！　また直さないといけないのよっ！」

「黙ってて、姉さん。それで？　アンタ何者？　さっさと話してくれない？」

「……はあ……」



どうやらまだ連絡は届けられそうにないようだ……